仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上Ⅰ遺跡

― 平安時代後半～中世の水田跡 ―

1985年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上Ⅰ遺跡

― 平安時代後半～中世の水田跡 ―

1985年3月

仙台市教育委員会

序

近年、埋蔵文化財の発掘調査の方法も、遺構・遺物の性格をきわめるに留らず、遺構・遺物が包蔵されている環境条件をも解き明かすことによって、より詳細な生活環境の復原にまで及ぶ時代に入ったといえる。土壌学、地形学、植物生態学、地質学等はもとより花粉分析、プラント・オパール分析、熱ルミネッセス法、フィッショントラック法など物理・化学の領域との連携をも重要視する方向に動いている。特に沖積低地に営まれた遺跡の発掘調査は特に顕著であるといえる。

本書は、欠ノ上Ⅰ遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであるが、関連科学との連関をもちながら行った調査である。平安中期に始まった稲作は、平安後半～中世前半までの水田面では、10アール当り7.6トンの生産量を得ていること、中世後半の乾燥した微高地に於ける稲作は、10アール当り5.5トン、江戸時代になると全域で水田耕作が実施されていて、10アール当り11.1トンの生産量を得ていたことが解き明かされている。

こうして得られた資料は、歴史文献学とのさらなる吟味、検討を行うことによって、各時代毎の生産史や生活環境の様相が実態的に解明されることを考えるとき、埋蔵文化財がもつ意義はさらに深いものがあるといえよう。

最近の市街地拡大に伴う開発行為は増加の一途をたどっている。開発と保護という相反する現象をいかに調整を図っていくかは、文化財の保護行政にとっては、迫られた重大な課題である。文化財がもつ意味を深く認識し、市民と広く公議を起し、協調しながら文化財保護に対する思想高揚策を講ずる必要を感ずるものである。

さて、本書が多少なりとも文化財保護行政に貢献することを深く念じて序とする次第である。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

委員長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は宅地造成に先立って行なった欠ノ上Ⅰ遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－287）の発掘調査報告書である。

2．発掘調査・遺物整理は社会教育課文化財調査係　佐藤甲二・渡辺誠・小野寺和幸が担当し、陶磁器の鑑定は、佐藤洋が行なった。

3．本書の編集・執筆は佐藤甲二が行ない、プラント・オパール分析に関しては、佐々木章氏・藤原宏志氏からの御寄稿を頂き、付章として収録させて頂いた。

大分短期大学　　佐々木章氏　仙台：欠ノ上遺跡土壌のプラント・オパール分析

宮崎大学農学部　藤原宏志氏

4．種子の同定は東北大学農学部　星川清親氏に、火山灰の同定は東北大学農学部　山田一郎氏に、石製品の石質鑑定は仙台市科学館　佐々木隆氏にお願いした。

5．本書中の土色については「新版標準土色帳（小山・竹原：1973）を使用した。

6．本書に掲載した第１図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１「仙台西南部」「仙台東南部」を使用した。

7．方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0′である。

8．全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

発掘調査参加者名

浅見礼子　大山のり子　菊池豊　佐々木うめの　佐々木茂信　斎藤紀子　黒田久子　庄子敦　庄司明　柏倉セツ子　佐藤紀美　佐藤みよ　菅井きみ子　菅井ちよの　菅井かつの　丹野正作　仲山市子　村上令子　松林四郎　吉野たま子　本郷孝治　横山麗子　村上篤　宮崎進　阿部貴　大宮裕二　菅ノ又三千代　丸子正市　三塚朝代　沼田幸子　佐藤幸一郎　平磯けい子　加藤和　大内幸子　今出宏子　大槻章　高橋秀夫　佐藤延子

遺物整理参加者名

菊池豊　庄子敦　村上篤　宮崎進　大宮裕二　阿部多津子　金沢君代

1．Ⅱ区 Ⅲｂ層水田跡
（南から）

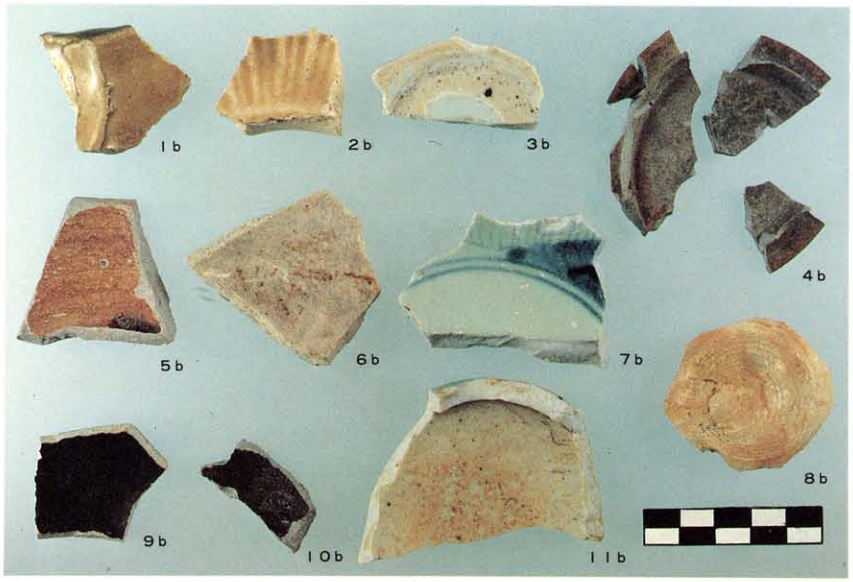
2．Ⅱ区 Ⅳａ層水田跡
（北から）

3．Ⅰ区 Ⅳａ層水田跡
（北から）

4．青磁・常滑・唐津・志野(外面)

青磁・常滑・唐津・志野(内面)

5．瀬戸・美濃・肥前・相馬（外面）



瀬戸・美濃・肥前・相馬（内面）

6．瀬戸？

本　文　目　次

序　　文
例　　言
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　調査の方法と概要……3
　1．調査に至る経過……3
　2．調査方法……3
　3．基本層位……3
　4．調査概要……4
第Ⅲ章　検出遺構……13
　1．Ⅰ区……13
　2．Ⅱ区……14
　3．Ⅲ区……19
　4．その他の地区……20
第Ⅳ章　出土遺物……28
第Ⅴ章　考察とまとめ……33
　1．検出遺構の所属年代……33
　2．水田跡について……34
　3．まとめ……35
付章　仙台：欠ノ上Ⅰ遺跡土壌のプラント・オパール分析……36

写真図版目次

写真図版1　遺跡全景1……41
写真図版2　遺跡全景2・基本層位……42
写真図版3　O－18グリッド検出遺構……43
写真図版4　J－18グリッド検出遺構……44
写真図版5　Ⅰ区検出遺構1……45
写真図版6　Ⅰ区検出遺構2……46
写真図版7　Ⅱ区検出遺構1……47
写真図版8　Ⅱ区検出遺構2……48
写真図版9　Ⅱ区検出遺構3……49
写真図版10　Ⅱ区検出遺構4……50
写真図版11　Ⅲ区検出遺構1……51
写真図版12　Ⅲ区検出遺構2
　・雨水管検出遺構……52
写真図版13　出土遺物1……53
写真図版14　出土遺物2……54
写真図版15　出土遺物3……55

写真図版16　出土遺物４……56
写真図版17　出土遺物５……57
写真図版18　出土遺物６……58
写真図版19　出土遺物７……59

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……1
第２図　調査対象区現況図及びグリッド配置図……5
第３図　基本層位及び各グリッド土層柱状図……7・8
第４図　Ⅲｂ層水田跡作土上面畦・水路平面図……9・10
第５図　Ⅳａ層水田跡作土上面畦・水路平面図……11・12
第６図　Ⅰ区Ⅲｂ層・Ⅳａ層水田跡平面・断面図……15・16
第７図　Ⅱ区Ⅲ層上面検出遺構、Ⅲｂ層水田跡平面・断面図……17・18
第８図　Ⅱ区Ⅳａ層水田跡平面・断面図……21・22
第９図　Ⅲ区Ⅲｂ層・Ⅳａ層水田跡平面・断面図……23・24
第10図　Ｏ－18グリッドⅢｂ層・Ⅳａ層水田跡水田跡平面・断面図……25
第11図　Ｊ－18グリッド、雨水管（Ｓ－18グリッド）Ⅲｂ・Ⅳａ層水田跡平面・断面図……27
第12図　出土遺物（土師器・陶磁器）……30
第13図　出土遺物（瓦・人形・石製品１）……31
第14図　出土遺物（石製品２・金属製品）……32
第15図　砂礫層低下想定ライン……35
第16図　プラント・オパール定量分析手順……37
第17図　プラント・オパールから推定した植物体量(1)……38
第18図　プラント・オパールから推定した植物体量(2)……39

表　目　次

第１表　基本層位土層註記表……6
第２表　出土遺物総数量表……29
第３表　Ⅲb層水田跡とⅣa層水田跡の比較……34
第４表　植物体中の珪化機動細胞……37
第５表　巻頭カラー図版・写真図版遺物観察表……60

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

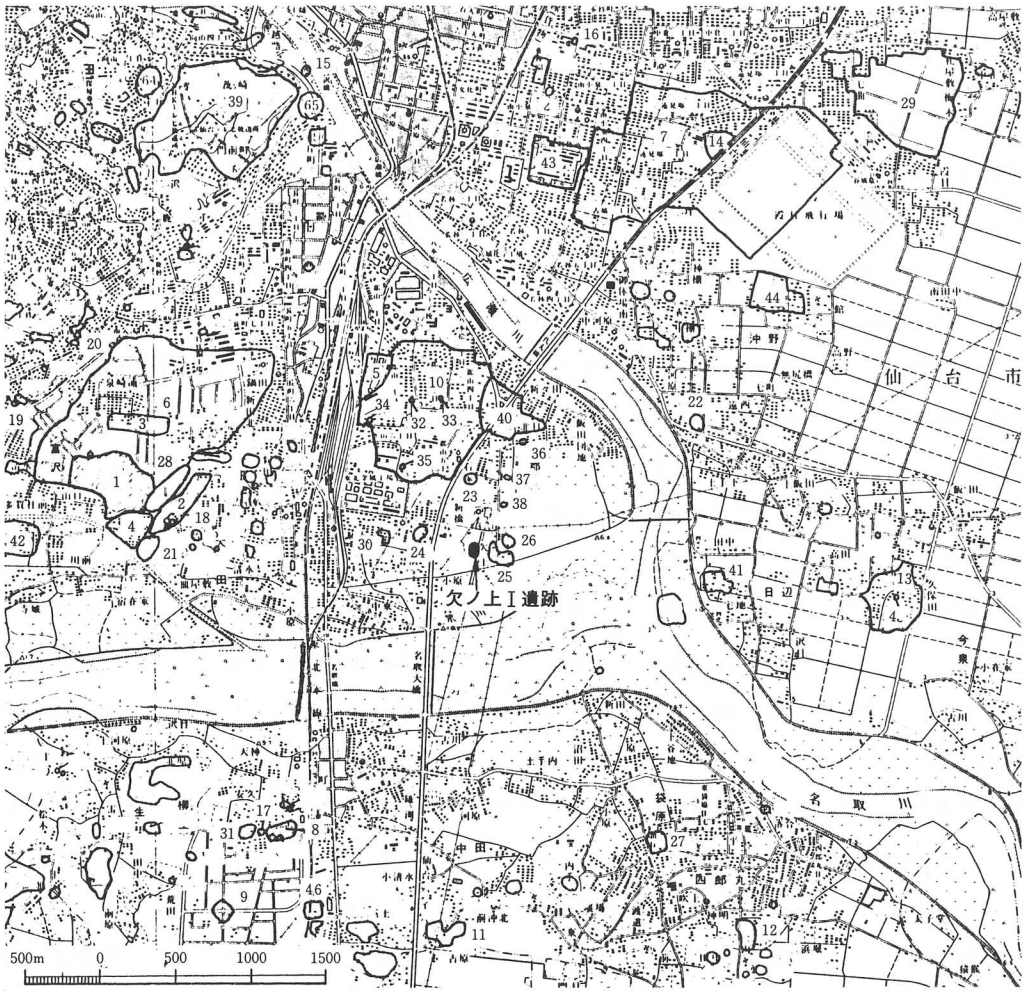
仙台市は西側に標高300～100ｍの丘陵地帯、東側には東～南東流する七北田川、名取川―広瀬川によって形成された沖積平野が拡がる。また、これら河川の両岸には４～５段から成る河岸段丘が発達している。沖積面は地形の性質・地域的まとまりから幾つかの低地に分けられており、名取川と支流広瀬川に挟まれた地域は郡山低地[註]と呼ばれている。

欠ノ上Ⅰ遺跡は、郡山低地東端に位置し、後背湿地上に立地する。東北本線長町駅の南東1.6kmで、遺跡のすぐ西を仙台バイパスが南北に走っている。南側を東流する名取川まで約0.7kmで、遺跡の南東約１kmの地点で名取川に広瀬川が合流する。遺跡の現況は水田で、標高7.5～8.0ｍの間である。南側の名取川の堤防との比高差が２ｍ強あるためか、やや低い感じのする地形である。この地区は、以前まで名取川の氾濫により、よく冠水した地区の一つで、激しい時には２ｍ以上も冠水したという。

名取川と広瀬川に挟まれた沖積面は、仙台市域でも考古学的調査が比較的多く行なわれている地域である。富沢地区では、下ノ内浦遺跡(28)より縄文時代早期の押型文土器が出土しており、すでにこの時期には人間の活動の場となっていたことが明らかにされている。縄文時代も中期中葉以降になると自然堤防上に立地する六反田遺跡(２)、下ノ内遺跡(４)、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡(21)等に集落、墓域（配石遺構）が形成され始め、当地区は居住域としての性格をおび、その後の時代へと受け継がれる。弥生時代になると富沢地区は広大な後背湿地を利用し、水田が営まれるようになる。富沢水田遺跡(６)からは、弥生時代中期から中世にわたる水田跡が検出されている。東北本線の東側に当る郡山地区では、現在のところ縄文時代の痕跡は、西台畑遺跡(５)で後期の土器が出土したのみである。遺構を伴う例は全て弥生時代以降で、西台畑遺跡では弥生中期の墓が検出されている。その後の７世紀後半から８世紀初頭には、当地区に多賀城以前の官衙跡と考えられる郡山遺跡(10)が創建されている。また、当地区には中世の古碑群が多く残っており、広瀬川の自然堤防上には中世から近世にかけての北目城跡(40)が築かれている。

以上のように名取川と広瀬川に挟まれた沖積面には、縄文時代早期より現代に至るまでのさまざまな遺跡が残されている。これら遺跡は、地形的制約（自然堤防、後背湿地等）を受けつつも、逆にその特徴を利用することにより、各種の遺跡を生み出し、これを発展させてきた。今回、仙台バイパスより東側の地域が初めて調査対象となった。これにより、この地域の歴史がより広域的に明らかにされていくものと思われる。

註：経済企画庁『地形・表層地質・土じょう　仙台』　1967



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	山口遺跡	集落跡	自然堤防・後背湿地	縄文～近世	24	籠ノ瀬遺跡	包合地	自然堤防	古墳～平安
2	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～近世	25	欠ノ上Ⅱ遺跡	包合地	自然堤防	古墳～平安
3	泉崎浦遺跡	集落跡	沖積平野(扇状地他)	縄文～近世	26	欠ノ上Ⅲ遺跡	包合地	自然堤防	古墳～平安
4	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	27	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
5	西台畑遺跡	墓跡	自然堤防	縄文～古墳	28	下ノ内浦遺跡	集落跡・墓跡	自然堤防	縄文～平安
6	富沢水田遺跡	水田跡	沖積平野	弥生～中世	29	仙台東郊条理跡	条理遺構	沖積平野	奈良～平安
7	南小泉遺跡	集落跡	沖積平野	弥生～近世	30	的場遺跡	包合地	自然堤防	奈良～平安
8	安久東遺跡	集落跡・古墳群	自然堤防	弥生～近世	31	安久遺跡	集落跡・古墳	沖積平野	奈良～平安
9	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安	32	八幡社古碑群	――	――	中世
10	郡山遺跡	官衙跡・住落跡	自然堤防	弥生～中世	33	郡山三丁目古碑群	――	――	中世
11	後河原遺跡	水田跡	自然堤防・後背湿地	弥生～近世	34	長町駅古碑群	――	――	中世
12	戸ノ内Ⅰ遺跡	集落跡・墓跡	自然堤防	弥生～中世	35	諏訪社古碑群	――	――	中世
13	今泉遺跡(今泉城跡を含む)	集落跡・城館	自然堤防	弥生～近世	36	宅地古碑群	――	――	中世
14	遠見塚古墳	前方後円墳	沖積平野	古墳	37	北目古碑群	――	――	中世
15	宗禅寺横穴群	横穴古墳群	段丘	古墳	38	穴田東古碑群	――	――	中世
16	法領塚古墳	円墳	沖積平野	古墳	39	茂ケ崎城跡	城館	丘陵頂部及び斜面	中世
17	安久諏訪古墳	(旧所在地)	自然堤防	古墳	40	北目城跡	城館	自然堤防	中世～近世
18	大野田古墳	円墳？	沖積平野	古墳	41	日辺館跡	城館	沖積平野	中世～世
19	裏町古墳	前方後円墳	台地	古墳	42	富沢館跡	城館	自然堤防	中世～世
20	砂押古墳	円墳又は前方後円墳	台地	古墳	43	若林城跡	城館	沖積平野・内陸高地	中世～近世
21	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安	44	沖野城跡	城館	自然堤防	中世～世
22	河原越遺跡	包合地	自然堤防	古墳～平安	45	今泉城跡出土板碑	――	――	中世～世
23	矢来遺跡	包合地	自然堤防	古墳～平安	46	前田館跡(柿沼館)	城館	沖積地	中世～世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章　調査の方法と概要

1．調査に至る経過

広瀬・名取川に挟まれ、西辺を東北本線が走る郡山地区は、仙台バイパスにより東西に二分割されている。西側には古くからの民家が立ち並び、仙台地域の中では現在、住宅の建て替えが盛んな地域の一つとなっている。これに比べ東側は、現在も水田地帯の面影を残す地域であるが、近年、他地域と同様に宅地造成の波がおしよせている。このたび、欠ノ上Ⅰ遺跡を包括する仙台市郡山字谷地田西１－１他の1900m²に宅地が造成されることとなった。仙台市教育委員会では、申請者仙台市農業協同組合、施工主大木建設株式会社と協議を重ね、その結果(1)開発地域に１ｍ以上の盛土を加えることにより、地下遺構の保存を計る(2)ただし、取り付け道路下の地下埋設管等により、地下遺構が損なわれる可能性がある場所は調査対象とする(3)欠ノ上Ⅰ遺跡の性格づけを引き出す調査を併行して行うことが三者間で確認された。これを受けて仙台市教育委員会では、造成工事に先がけ、事前調査を実施するに至った。

2．調　査　方　法（第２図）

開発地域のほぼ中央に南北に取り付く道路を南北ライン（N－1°－W）とし、これに直行する東西ラインによりグリッドを設定し、調査を進めた。グリッドは１区画６×６ｍとした。南北ラインはＡ～Ｚまで、東西ラインは１～32まで設けた。調査に関しては、道路部分に当るグリッドを優先し、これを先行グリッドとした。その状況に応じ随時、拡張を行なった。

3．基　本　層　位（第３図）

基本層位は現水田面のⅠ層より砂礫層のⅪ層までの大別11層が確認された。これらはさらに21層に細別される。細別層を含めた基本層位が、Ⅰ層からⅪ層まで順序だって認められた地点はない。Ｚ－18グリッド南西隅では最もⅪ層が上っており、表土下約1.2m（標高7.5mからは0.75m下）で顔を出す。これとは反対にＤ－19グリッド北西隅、Ｏ－13グリッド南西隅では、ともに表土下約2.7m（標高7.5mからは約2.5m下）でⅪ層となり、Ⅺ層が下っている。３は各グリッドに於ける砂礫層までの柱状図を、①～⑥までの縦断図で表わしたものである。１の矢印方向は、縦断面のⅪ層の傾斜方向を示す(例えば②は南から北への下り傾斜)。また、３は各グリッド内のⅪ層までの深さを色別けしたものである（最大値、最小値と両数値に近い数値のもののみ記載)。これによるとⅪ層は調査地区北西側、南東側で上っており、その間は下っていることが理解出来る。

基本層の内、Ⅲc層、Ⅳb層は、それぞれ水田作土、Ⅲb層、Ⅳa層の直下に存在し、上層に酷似し

ている。この両層は、本来上層と同一のものであったが、耕作が及んだか（Ⅲｂ・Ⅳａ）、及ばなかったか（Ⅲｃ・Ⅳｂ）によって分離されたものと考えたい。Ⅲb′層、Ⅳa′層は水田外部分と想定されるＦ－４・５地区に分布する。調査区ではⅢｃ層、Ⅳｂ層との連続性を確認出来る地点を見出せなかったが、土性の上からは同一層の可能性も考えられる。Ⅶ層中に含まれる火山灰は、降下年代が10世紀前半と考えられている灰白色火山灰である。この火山灰は、Ⅺ層が下る地区においては、Ⅶ層全体が火山灰となる。また逆に、Ⅺ層が上る地点では、少量ブロック状に含まれたり、全く肉眼観察では認められない状態となっており、深みに沿って流れ込んだ、すなわち二次堆積状況を示す。Ⅵ層以下Ⅸ層までの各層は、未分解の植物遺体を含み、いわゆるスクモ状を呈する場合がある。このような状態はⅺ層の下る地点で顕著である。

4．調　査　概　要

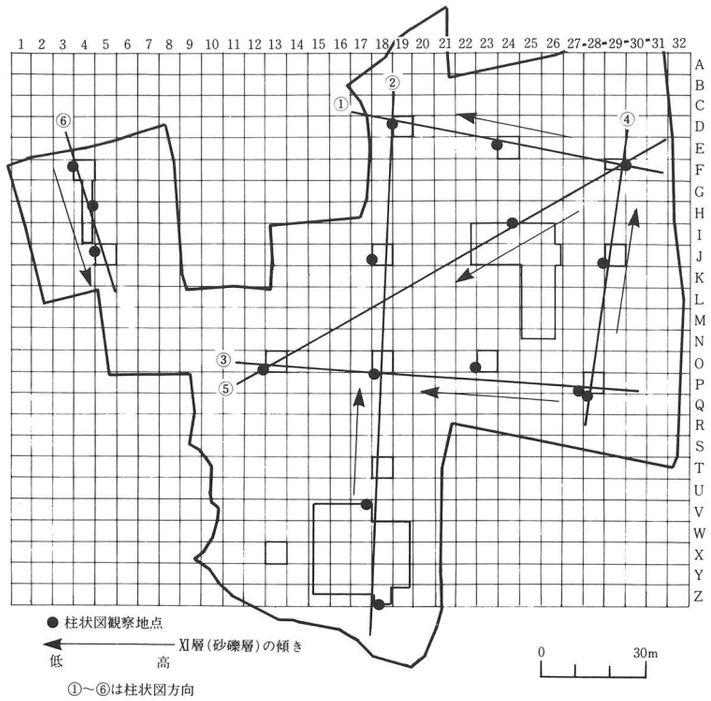
調査は昭和59年６月11日に開始し、同年８月31日までの約2.5ヶ月間実施した。調査対象面積は1900㎡で、調査面積は約1850㎡である。５月中はＤ－19、Ｅ－24、Ｆ－４・29、Ｉ－24、Ｊ－５・18・29、Ｏ－13・18・23、Ｐ－28、Ｔ－18、Ｘ－13、Ｚ－18グリッドを試掘構とする調査を進めた。その結果、Ｉ－24、Ｏ－18、Ｔ－18、Ｚ－18の４グリッドのⅢｂ層上面で、畦状の高まりが検出された。また、Ｊ－18、Ｏ－18、Ｚ－18の３グリッドでは、Ⅳａ層上面にも、畦状の高まりや、水路状の溝が認められた。この試掘調査と併行し、Ｐ－28グリッドでプラント・オパール分析を行なった結果、Ⅳ層以上の各層に水田跡の可能性があることが判明した。これらの結果を踏えた上で、６月以降、本格的な調査を実施した。調査はⅡ層以上の水田跡がすでに削手を受け、その痕跡をほとんどとどめていないことより、Ⅲｂ層、及びⅥａ層の水田跡に絞られた。両層の水田跡の調査に際しては、水田跡１枚の規模と形状の把握を主眼に置いた。以上に基づき、Ｉ－24グリッドを中心にし、東・西・南へ拡張したＩ区（約500㎡）。Ｚ－18グリッドを中心にし、北・東・西へ拡張したⅡ区（約680㎡）、Ｆ－４とＪ－５グリッドを結ぶⅢ区（約130㎡）の３拡張区を設けた。これら調査に加え、雨水管工事（幅約１ｍ）により、Ⅲｂ層・Ⅳａ層の水田跡が破壊される箇所（Ｏ－14～28、Ｐ－26、Ｇ～Ｖ－18グリッド）の調査も合せて行なった。その結果、まず、Ⅲｂ層上面では各区より中世の水田跡が検出された。また、Ⅳａ層上面でも各区より平安時代末～中世にかけての水田跡が検出された。Ⅴ層以下では、本調査区及び試掘区からも遺構らしきものは検出されていない。出土遺物は調査面積に比して平箱１箱（テンバコ27）と極端に少ない。その内でも、Ⅱ層からの出土量が最も多く、Ⅴ層以下では、Ⅶ層より土師器片が１点出土（Ｏ－18グリッド）したのみである。遺物の種類としては陶磁器片が多い。出土遺物は数例を除き全て破片資料である。

※太線実線は調査対象区
太線破線は欠ノ上Ⅰ遺跡範囲

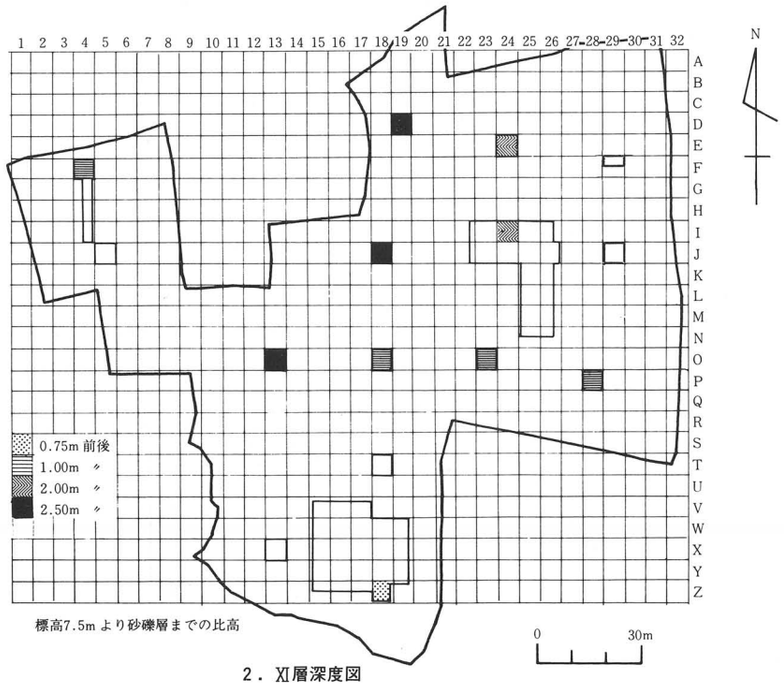
第２図　調査対象区現況図及びグリッド配置図

第1表　基本層位土層註記表

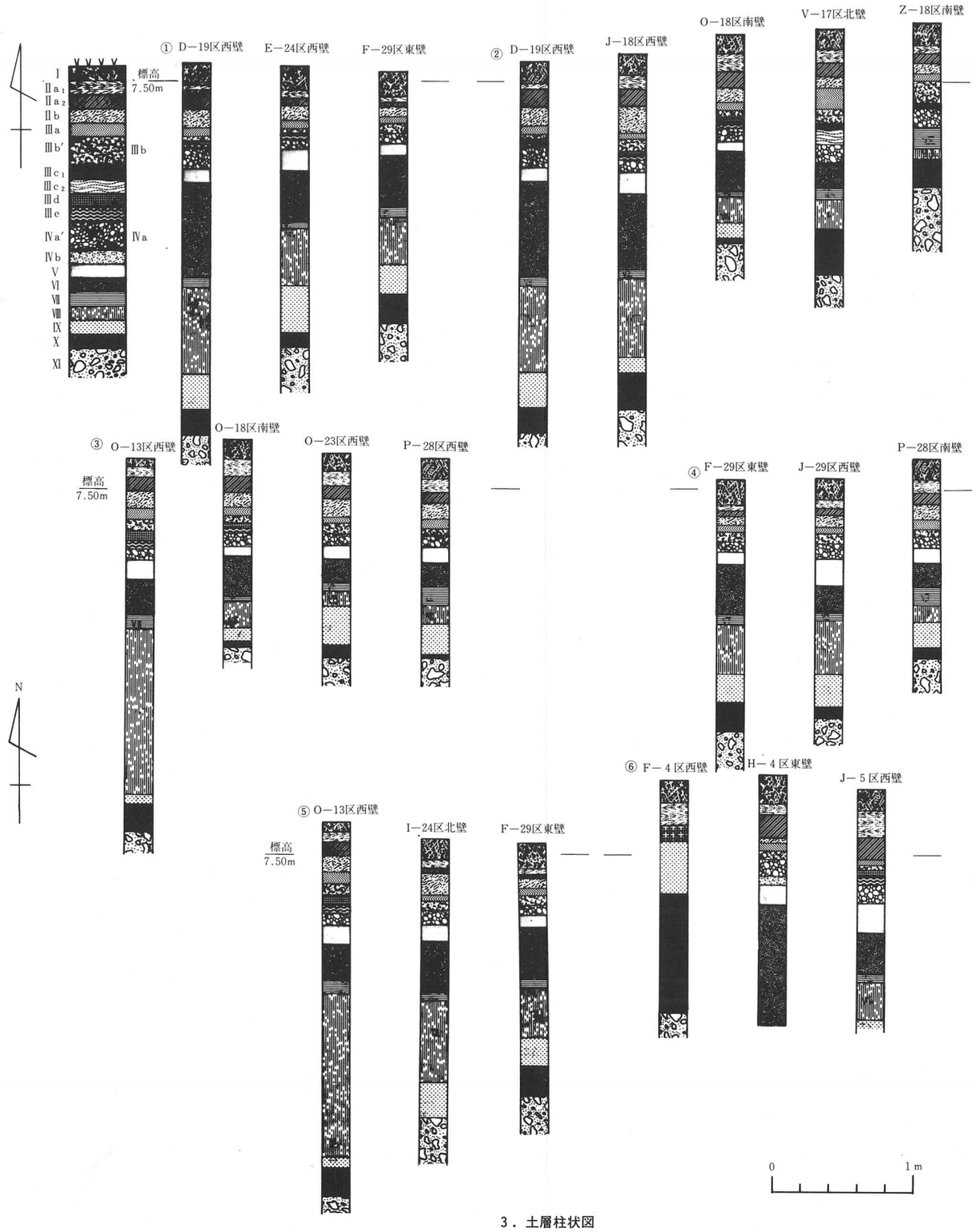
層位	土色	土質	粘性	しまり	グライ化	層厚	混入物	分布域	出土遺物	形成時期	備考
Ⅰ	灰色 7.5YR 5/1	シルト質粘土	有	有	有	20cm前後	鉄分・マンガン斑状。	全域	土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，瓦，ガラス製品，金属製品。	現代	現水田層，安定層，下面平坦。
Ⅱa₁	褐灰色 10YR 5/1	粘土質シルト	やや有	やや有	—	5～10cm	鉄分多量。マンガン粒斑状。	F－4以外の全域	土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，瓦，ガラス製品，金属製品，石製品。	明治～1層形成前	水田作土。下面ほぼ平坦鉄分の量で上下に分層（下層多量）
Ⅱa₂	褐灰色 10YR 5/1	粘土質シルト	やや有	やや有	—	10～15cm	鉄分少量。マンガン粒斑状。	全域	土師器，土師質土器，陶磁器，金属製品。	幕末～明治	水田作土。下面ほぼ平坦。
Ⅱb	褐灰色 10YR 5/1	粘土質シルト	やや有	やや有	—	7～15cm	鉄分少量。マンガン粒斑状。	全域	土師器，須恵器，土師質土器，陶磁器，金属製品。	江戸時代	水田作土。下面平坦。
Ⅲa	褐灰色 10YR 5/1	シルト質粘土	有	やや有	—	5～15cm	鉄分縦縞状。マンガン粒斑状。	全域	須恵器。	—	連続性を持たない不安定な層。
Ⅲb	黄灰色 2.5Y 5/1	シルト質粘土	有	やや無	—	10～15cm	鉄分縦縞状。マンガン粒斑状。褐灰色・浅黄色シルトブロック横縞状に多量炭化物少量。	F－4以外の全域	土師器，土師質土器，陶器。	鎌倉後半～Ⅱa層形成以前	Ⅲ層水田作土。下層上面に鉄分の集積が認められる場合あり。下面平坦。Ⅰ区色調褐灰色10YR 5/1。
Ⅲb′	黄灰色 2.5Y 4/1	シルト質粘土	有	やや無	—	10cm前後	鉄分縦縞状。b層に比べマンガン粒多量。	F・G－4	土師器，須恵器，土師質土器，骨。	同上	水田外部分の水田作土との対応層下面凹凸。
Ⅲc₁	灰黄褐色 10YR 5/2	シルト質粘土	有	やや無	—	7cm前後	鉄分縦縞状。マンガン粒多量。	Ⅱ区	青磁。	同上	Ⅲb層と同一時形成？連続性に欠け不安定な層。Ⅲb層に酷似。Ⅲb層と同一？
Ⅲc₂	灰黄褐色 10YR 5/2	シルト質粘土	有	やや無	—	7cm前後	鉄分縦縞状。マンガン粒斑状。	Ⅱ区	無	同上	c₁と下層との漸移層。断片的な分布。
Ⅲd	にぶい黄褐色 10YR 7/4	砂質シルト	やや有	有	—	3～5cm	鉄分縦縞状。	Qライン以北	無	—	上面鉄分の集積。断片的な分布。
Ⅲe	黒褐色 10YR 3/1	粘土	強	無	—	5cm前後	炭化物	Qライン以北	無	—	断片的で層厚も安定しない。厚い部分10cm。
Ⅳa	黄灰色 2.5Y 5/1	粘土	強	無	有	10～15cm	鉄分縦縞状。炭化物微量。	F・G－4以外の全域	須恵器。	平安時代後半～Ⅲe層形成以前	Ⅳ層水田作土。下層の上面に鉄分の集積。底面平坦。下位になるに従い粘性増。Ⅲ区では北へ行く程色調白色化。
Ⅳa′	暗灰黄色 2.5Y 5/2	粘土	強	無	有	15cm前後	鉄分縦縞状。炭化物。	F・G－4	土師器，須恵器，土師質土器。	同上	水田外部分の作土との対応層。下面凹凸。
Ⅳb	褐灰色 10YR 4/1	粘土	強	無	有	5cm前後	鉄分縦縞状。	Ⅲ区	無	—	Ⅳaと同一時形成層？連続性を欠き，層厚も安定しない。Ⅳa層に酷似。Ⅳa′層と同一？
Ⅴ	褐灰色 10YR 4/1	粘土	強	無	有	10～15cm	鉄分縦縞状。にぶい黄褐色粘土ブロック状。	Ⅰ区以外の全域	無	—	Ⅲ区では北へ行く程色調が白色化。
Ⅵ	褐灰色 10YR 5/1 黒色 2.5Y 3/1 淡黄色 2.5Y 3/3	粘土	強	無	有	40cm前後	鉄分縦縞状。J－5では未分解の極物。物を多量に含みスクモ状。	Ⅲ区Gライン以北以外	無	—	上・下に分層出来，下層は黒色，淡黄色粘土の互層。上層上面凹凸。上層・下層下面平坦。D－19付近が最も厚く70cmを測る。
Ⅶ	黄灰色 2.5Y 5/1	粘土	強	無	有	5～15cm	鉄分縦縞状。灰白色火山灰ブロック。調査区中央部では未分解の植物を含み，J－5ではスクモ状。	全域	土師器。	平安時代中期	調査区北端・南端では火山灰ブロックが目立たなくなり中央部ではⅦ層全てが火山灰となる地点もある。
Ⅷ	灰黄褐色 10YR 5/2	粘土	強	無	有	40cm前後	鉄分縦縞状。灰白色粘土ブロック。未分解の植物。	全域	無	—	O－13では層厚が1m前後。
Ⅸ	緑灰色 10GY 5/1	砂質粘土	有	無	有	20cm前後	未分解の極物。サンドパイプ。	全域	無	—	—
Ⅹ	黄褐色 2.5Y 5/4	砂	無	有	—	30cm前後	鉄分付着。径2～5cmの小礫を上部に乗せる。未分解植物根多量。	全域	無	—	F－4では1m前後。
Ⅺ	にぶい赤褐色 5YR 5/4	砂礫	—	—	—	—	鉄分付着多量。径4～8cmの礫多量。未分解根物少量。	全域	無	—	—



1．XI層傾斜図

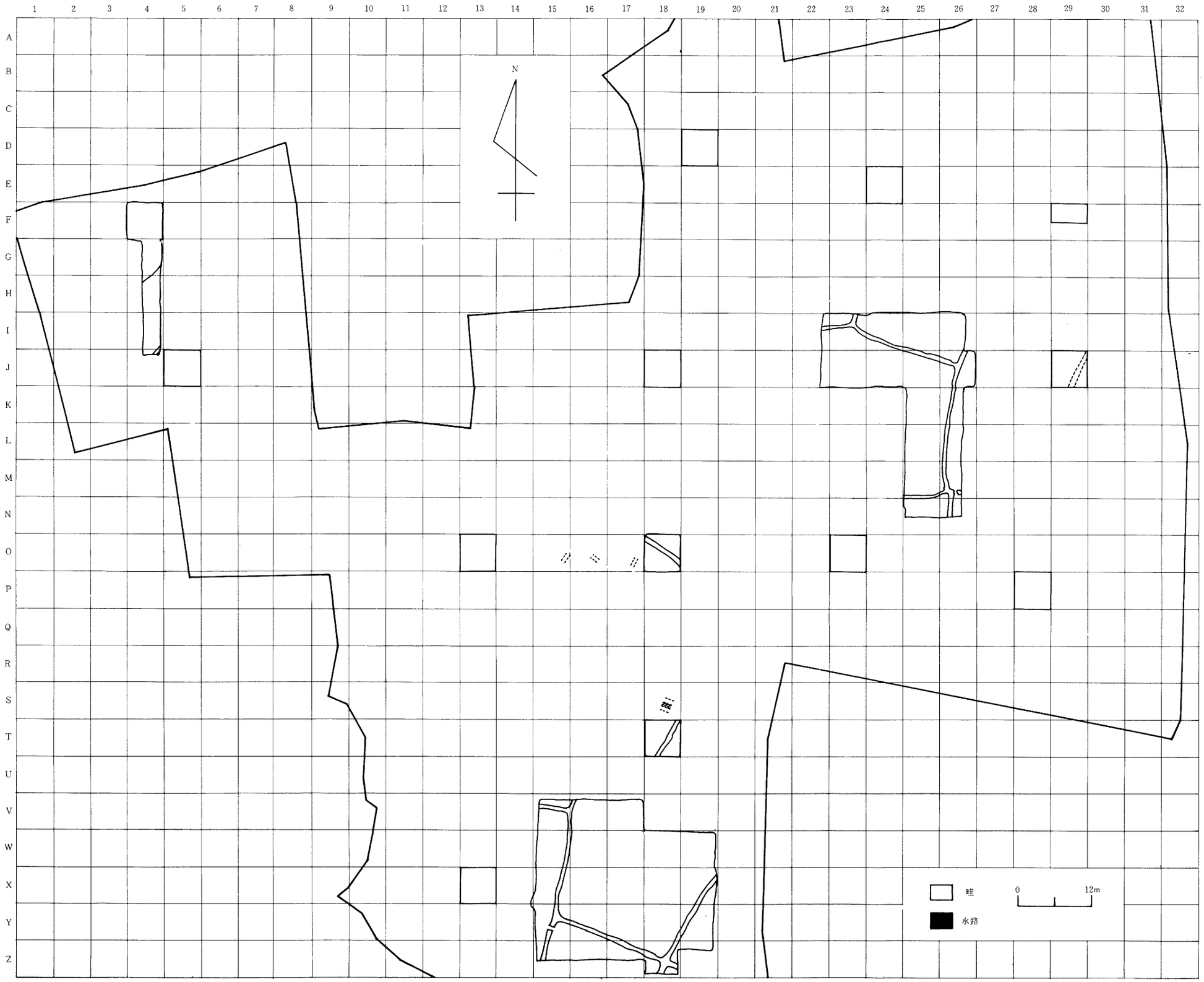


2．XI層深度図

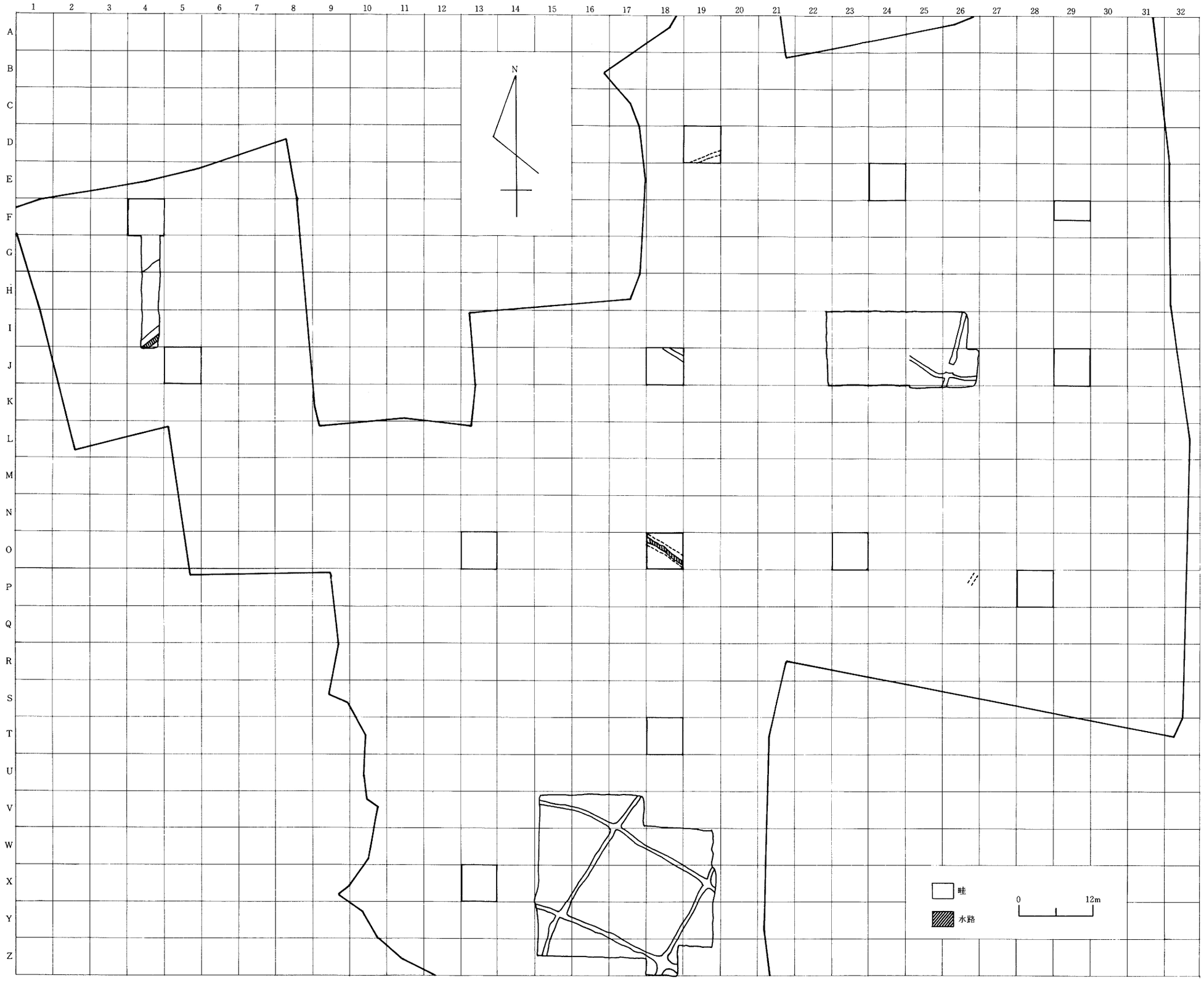


3．土層柱状図

第3図　基本層位及び各グリッド土層柱状図



第４図　Ⅲｂ層水田跡作土上面畦・水路平面図



第５図　Ⅳa層水田跡作土上面畦・水路平面図

第Ⅲ章　検　出　遺　構

1．Ⅰ　　区

Ⅰ－24グリッドの試掘結果を踏え、東・西・南側へ拡張した調査区である。Ⅲｂ層上面、Ⅳａ層上面で水田跡が検出された。

(1)　**Ⅲｂ層水田跡**（第６図）：Ⅰ－24グリッドに於いてⅢａ層を若干掘り下げた段階で、西北西－東南東に延びるⅢｂ層の高まりを検出した。これを追い、Ⅰ－22・23・25・26、Ｊ－22～26、Ｋ～Ｎ～25・26グリッドの全て、あるいは一部を遺構検出面まで開放した（開放面積481㎡）。畦の検出面の多くは、Ⅲa層上面であった。畦の両端には鉄分の沈着が認められた。作土の掘り上げは、Ｊグリッド以北とし、南側は検出のみにとどめた。

〔**畦の配列**〕畦の方向は、南北方向（Ｎ－約5°－Ｅ）、北北東↔南南西方向（Ｎ－約26°－Ｅ）のものと、これに交わる東西方向（Ｗ－約6°－Ｓ）、西北西↔東南東方向（Ｎ－約69°－Ｗ）から成る。畦方向に画一的な方向性は見出せない。これらの畦が交わる部分は、「＋」字状に交差する場合と、いずれかの方向のものが一方向にしか取り付かず「Ｔ」字状になる場合がある。

〔**畦の断面形・規模**〕畦は作土と同一土壌が使用されており、作土中ではその区別は付かない。作土上面は凹凸が激しく、畦の高まりが、10cm前後認められた場合もあれば、ほとんど作土と同レベルのものもあった。畦の作土上の断面形は台形状で、上面がやや凹状を呈する部分もある。畦の幅は、上端の残存良好部分で約30cm、作土上面でほぼ一定で80cm前後を測る。

〔**水口**〕Ｍ－26グリッドの畦が交差する東側で検出されたのみである。上面検出のみである。

〔**水田１区画の形状と規模**〕Ⅰ区では水田１区画分を検出出来なかったが、水田の形状は方形状を呈するものと推測される。１辺の規模が判るものには２例あり、それぞれ18・20ｍを測る。

〔**作土**〕底面はほぼ平坦で、作土幅は平均15cm前後である。作土の下層のⅣａ層上面には、鉄分の集積が認められる部分もある。作土底面は調査面に於いてはほぼ水平である。

〔**出土遺物**〕作土中より土師質土器片が１点出土している。

(2)　**Ⅳａ層水田跡**（第６図）：Ⅲｂ層水田跡調査区の内、Ｊグリッド以北を調査対象とした。25ライン以東では畦、水口が検出されたが、それより西側では、畦は明確に検出されなかった。畦の検出層位はⅢｂ層下面である。

〔**畦の方向**〕Ⅲｂ層水田跡の畦とほぼ同一方向を示す（Ｎ－約16°－Ｅ、Ｎ－約72°－Ｗ）。畦の交点は「十」字状である。

〔**畦の断面形・規模**〕畦はⅢｂ層水田と同様、作土と同一土壌である。畦の作土上の高まりは、顕著ではなく、明瞭な部分でも５cm以下である。畦の断面形は下弦の張りの少ない弧状を呈す。畦幅は、上端上で残存良好部分で約30cm、作土上面でほぼ一定で、約90cmを測る。

〔**水口**〕畦交点の北側で１ケ所検出された。平面形は約130×80cmの隅丸長方形で、縦断面はひらいた「U」字状を呈す。深さは畦上面より約３cmと浅い。作土上面よりは１～２cm高い。

〔**水田１区画の形状と規模**〕形状・規模とも当調査区では把握出来なかった。

〔**作土**〕底面はほぼ平坦で、厚さは平均10cm程である。下層のⅤ層上面には、不明瞭ながら鉄分の集積が認められた。作土底面はⅢａ層水田と同様にほぼ水平である。

〔**出土遺物**〕作土中より須恵器片（写真図版13－13）と土師質土器片が各１点出土した。

２．Ⅱ　　区

Ｚ－18グリッドの試掘で、Ⅲｂ層上面及びⅣａ層上面で水田跡が検出された。この結果に基づきⅤ－15～17、Ｗ～Ｚ－15～19グリッドの全て、あるいは一部を開放した（開於面積685㎡）。水田跡の他にはⅢａ層面上で、土壙が３基検出された。　　層上面で、

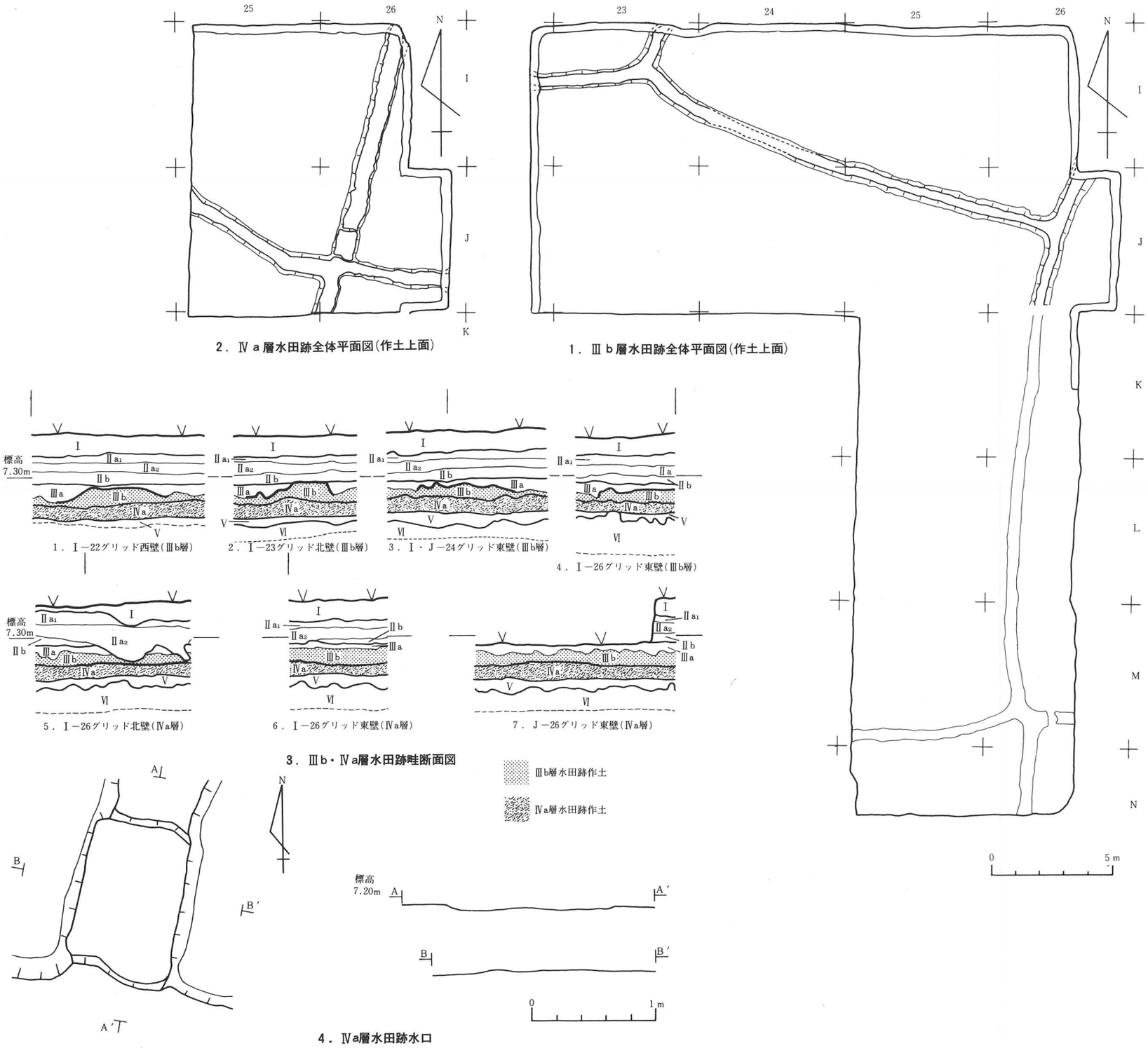
(1)　**土壙**（第７図）：Ⅲａ層上面で１号土壙（Ｗ－15・16グリッド）、２号土壙（Ｙ－15グリッド）、３号土壙（Ｗ・Ｘ－19グリッド）が検出された。平面形は１号が長楕円形（上・下端）、２号が不整楕円形（上・下端）、３号は隅丸方形（上・下端）である。規模は１号が約170×80cm、深さ24cm、２号が約120×90cm、深さが18cm、３号が約100×100cm、深さ31cmである。各土壙とも堆積土が単層で類似性が強い。出土遺物はない。

(2)　**Ⅲｂ層水田跡**（第７・８図）：Ⅲａ層上面、多くはⅢａ層を少し掘り下げた段階で畦が検出された。Ⅰ区と同様に畦の上面にマンガン粒の沈着、両端に鉄分の集積が認められた。尚、Ｘ・Ｙ－15グリッドでも南北方向の鉄分の集積部分（細線部分）が検出されたが、上層の畦のなごりか、当水田畦の前段階のものなのか判別出来なかった（南壁土層には盛り上りが認められず）。

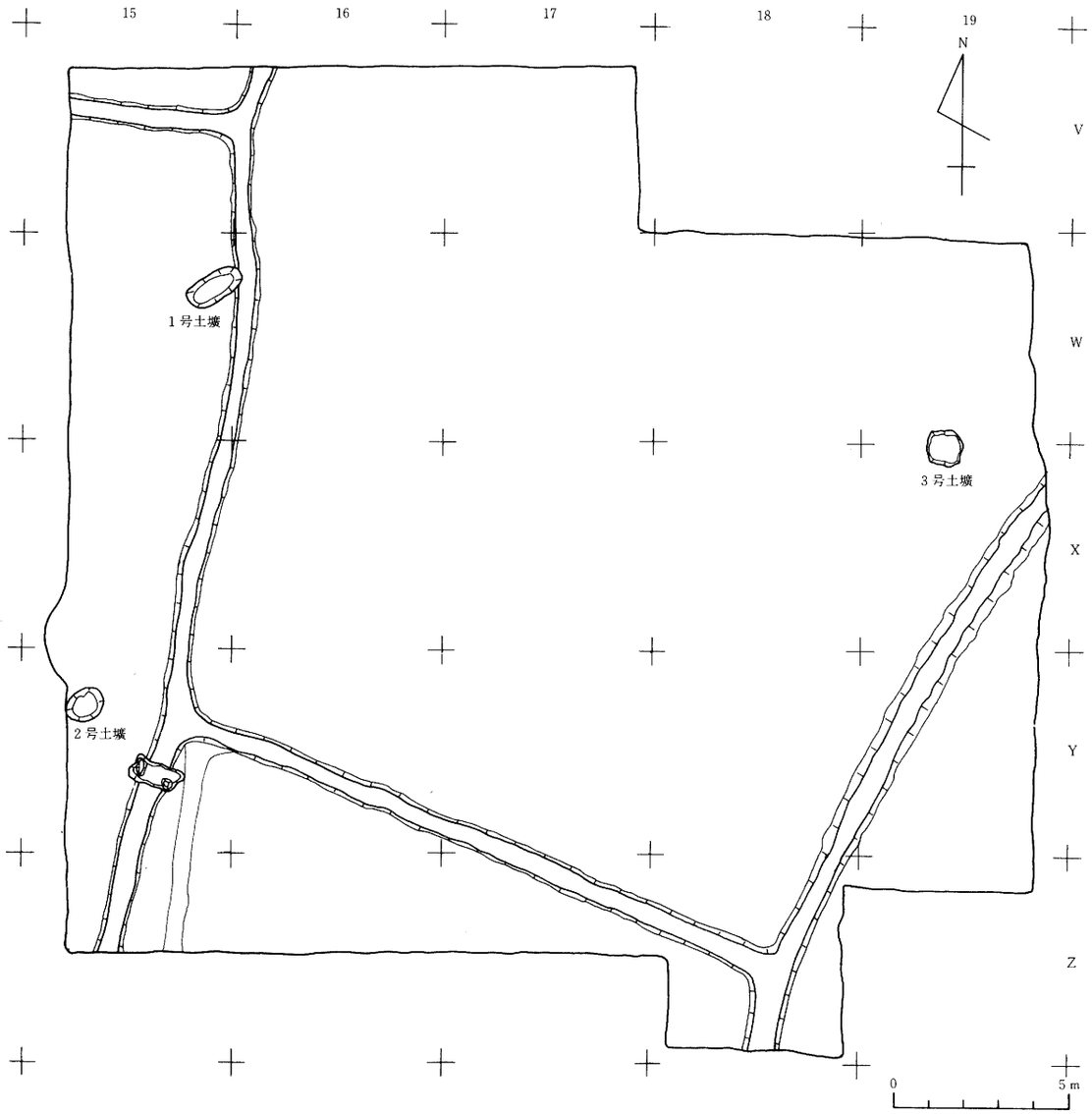
〔**畦の配列**〕畦の方向は、Ⅰ区と同様に南北方向（Ｎ－10°－Ｅ）、北北東↔南南西方向（Ｎ－約29°－Ｅ）のものと、これと交わる東西方向（Ｎ－83°－Ｗ）、西北西↔東南東方向（Ｎ－約64°－Ｗ）のものから成る。畦の交わる部分は、南北方向のものに東西方向のものが取り付き「Ｔ」字状を呈す。

〔**畦の断面形・規模**〕Ⅰ区同様、畦は作土と同一土壌が使用され、作土中に於いて、その区別は付かない。畦の作土上の高まりは、多くは10cm前後であるが、明確な高まりを持たない地点もある。畦の断面形は台形状あるいは下弦の張りの少ない弧状で、上面にはやや凹状を持つものもある。畦の両側の作土上面まやや凹状になる場合が多い。畦の幅は、上端では残存良好部分で約40cm、作土上面では75cm前後（17グリッド以西）、１ｍ前後（18グリッド以東）に分れる。

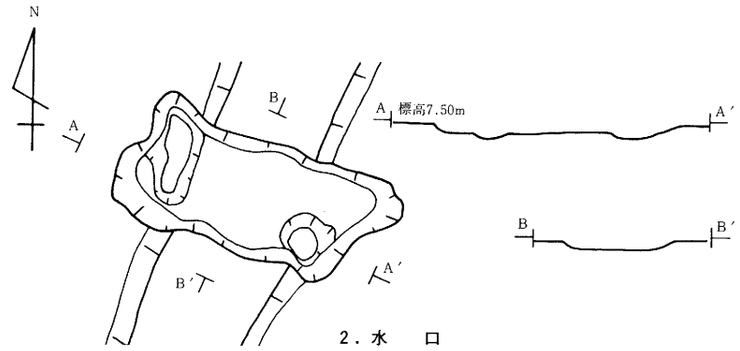
〔**水口**〕Ｙ－15グリッドの畦が交わる南面で１ケ所検出された。平面形は約150×70cmの不整長方形で、断面は開いた「U」字状を呈す。深さは作土上面より約５cmを測り、水口の両側が



第6図　Ⅰ区Ⅲｂ層・Ⅳａ層水田跡平面・断面図

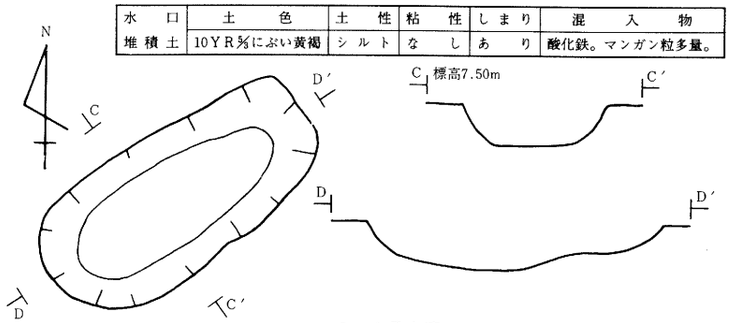


1．Ⅲb層水田跡平面図(作土上面)



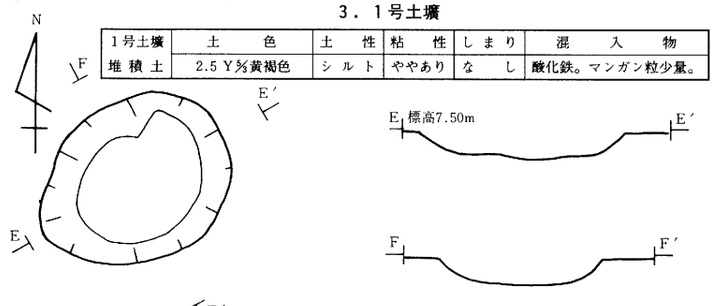
2．水　口

水　口	土　色	土　性	粘　性	しまり	混　入　物
堆積土	10YR5/3にぶい黄褐	シルト	なし	あり	酸化鉄。マンガン粒多量。



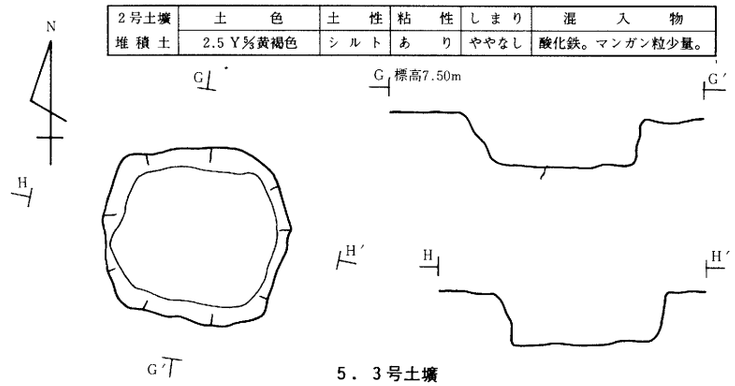
3．1号土壙

1号土壙	土　色	土　性	粘　性	しまり	混　入　物
堆積土	2.5Y5/3黄褐色	シルト	ややあり	なし	酸化鉄。マンガン粒少量。



4．2号土壙

2号土壙	土　色	土　性	粘　性	しまり	混　入　物
堆積土	2.5Y5/3黄褐色	シルト	あり	ややなし	酸化鉄。マンガン粒少量。



5．3号土壙

3号土壙	土　色	土　性	粘　性	しまり	混　入　物
堆積土	2.5Y5/3黄褐色	シルト	ややあり	ややなし	酸化鉄。マンガン粒少量。

0　1m

第7図　Ⅱ区Ⅲ層上面検出遺構、Ⅲb層水田跡平面・断面図

これよりやや窪む。Ⅴ－16グリッド北壁断面（第８図２－１）のⅢｂ層高まりを畦とした場合、すぐ南側の平面の畦とは約65cmのずれ（断面畦が西側へ）が生じてくる。このすぐ南側に畦の交点があり、検出水口の畦交点からの距離を考慮した場合、ここにも水口が付いた可能性は高い。

〔**水田１区画の形状と規模**〕水田１区画分を検出出来なかった為、形状・規模を把握し得なかった。ただし、短辺約20cmの長方形を呈することが推測される。

〔**作土**〕上面は凹凸が激しいが、下面はほぼ平坦である。厚さは10～15cmである。下層のⅢｃ層上面には明確に鉄分の集積は認められない。作土底面は南南西→北北東方向に平均6.7mm／１mの比高差を持ち、緩やかな下り傾斜を示す。

〔**出土遺物**〕作土中より常滑産の陶器片（巻頭写真４－２）が１点出土したのみである。

(3) Ⅳａ層水田跡（第８図）：Ⅲｂ層水田作土排土後、あるいはⅢc_1層排土後に畦が検出された。畦の両端には鉄分の集積が認められた。18グリッド以西は作土の掘り上げは行なわなかった。

〔**畦の配列**〕畦の方向は、Ⅰ区よりやや東へ傾いた北北東↔南南西方向（Ｎ－約33°－Ｅ）のものとほぼこれに直交する西北西↔東南東方向（Ｎ－約64°－Ｗ）のものから成る。

〔**畦の断面形・規模**〕畦と作土は同一土壌である。従って作土中に於いては、その区別は付かない。畦の作土上の残存度は、Ⅲｂ層水田跡の畦との係り合いで大きく左右される。畦上にⅢｂ層水田の畦が重なった場合は残存度が良好で、５cm以上の高まりを示す(第８図２－4～6)。それに反し、重ならなかった場合は、わずか数cm、あるいは作土上面と同レベルとなっている。畦の断面形は下弦の張りの少ない弧状を呈す。畦の両側の作土上面は、Ⅲｂ層水田と同様にやや凹状となる。畦幅は上端の残存良好部分で約50cm、作土上面でほぼ均一で80cm前後を測る。

〔**水口**〕畦の作土上の残存度が不良であった為か検出されなかった。

〔**水田１区画の形状と規模**〕当区では水田９区画分が検出された。しかし、明確な形状・規模が把握出来たのは１区画のみで、一辺約18mの正方形であった。

〔**作土**〕Ⅲｂ層水田同様、上面凹凸が激しいが、下面はほぼ平坦である。厚さは10cm前後である。下層の上面には鉄分の集積が明瞭には認められない。作土底面はⅢｂ層水田跡と同様に、南南西→北北東方向に平均11.7mm／１mの比高差を持ち、緩やかな下り傾斜を示す。

３．Ⅲ　　区

Ｆ－４、Ｊ－５グリッドの調査では何ら遺構を検出出来なかった。しかし、Ｆ－４グリッドに於ける土層が、他の地点に比べ変化に豊んでいることと、出土遺物点数が多いことより、両グリッドを結ぶＧ～Ｉ－４グリッドの東側３mを拡張し、Ⅲ区とした。その結果当区からもⅠ

・Ⅱ区と同様に、Ⅲｂ層・Ⅳａ層の両水田跡が検出された。

(1) **Ⅲｂ層水田跡**（第９図）：Ⅲｂ層上面で並行に走る畦が二本検出された。ともに畦方向を北東↔南西方向（Ｎ－約47°－Ｅ）にとる。南側の畦はⅠ・Ⅱ区と同様に作土と同一土壌が使用されており、作土中の畦は判別出来ない。作土上面から約10cmの高まりを持ち、断面は台形状を呈す。畦の幅は上端で約50cm、作土上面では約80cmを測る。北側の畦は、作土と同一土壌であるが、水田部分の土壌と考えられるⅢｂ′層から成る。Ⅲｂ′層は作土上面より約10cm高くなり、徐々に高さを増しながら北側へと続く。東壁断面の観察では、畦の上りから北へ約７cmの地点で畦の下りが認められた。しかし、西壁断面では確認出来ず、平面調査に於いても、これを裏付ける明確な調査結果を得られなかった。作土の上面は凹凸が激しかったが、底面はほぼ平坦であった。作土の厚さは他の地区に比べ薄く10cm以下であった。作土の下層であるⅢｄ層あるいはⅢｅ層の上面には、明確な鉄分の集積が認められた。作土の底面は北→南方向に約10mm／１ｍのゆるやかな下り傾斜を示す。水口、及び水路は検出されなかった。

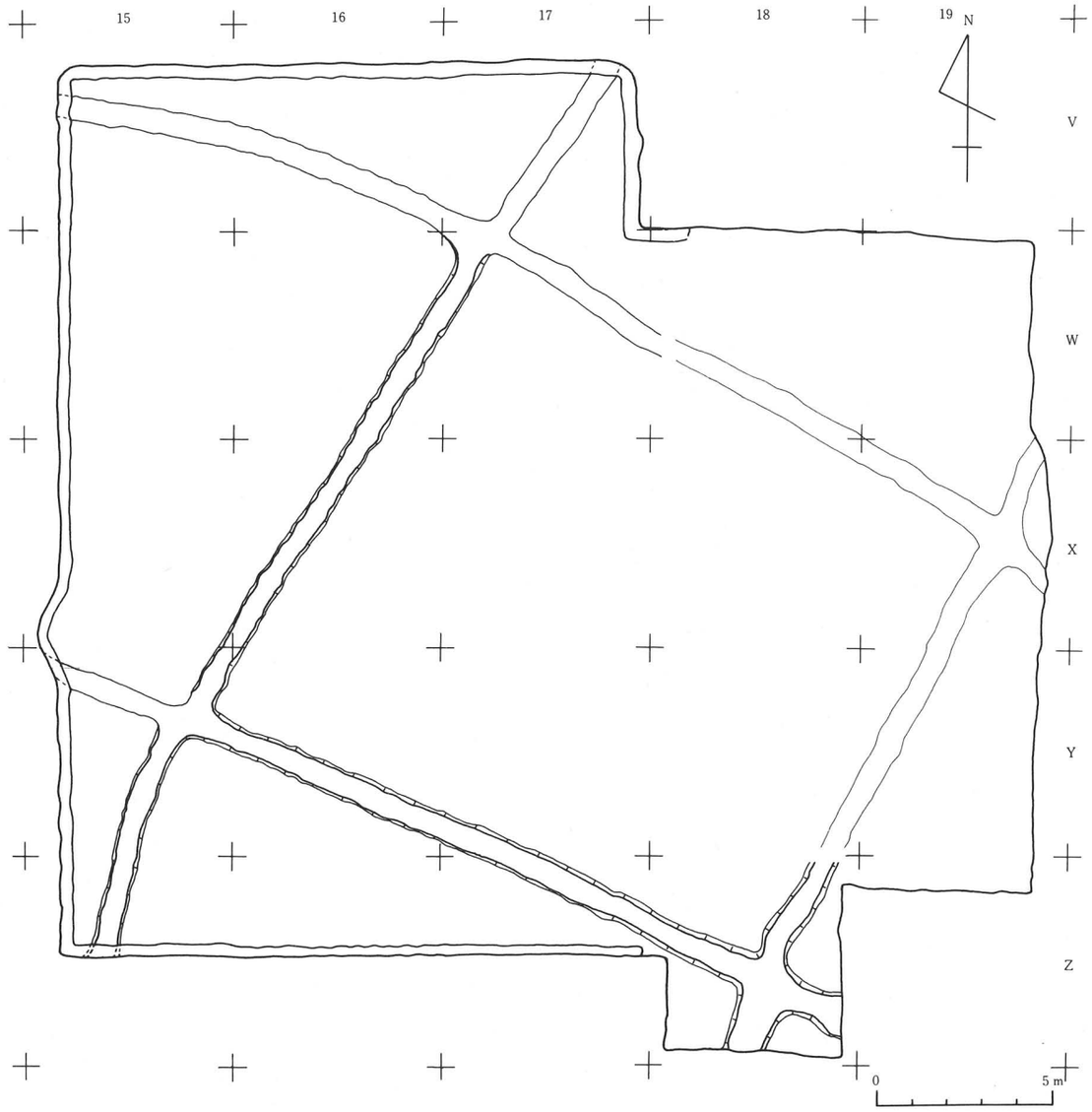
〔**出土遺物**〕Ⅲｂ層からは土師質土器片２点のみの出土であった。しかし、Ⅲｂ′層中よりは、土師器片11点、須恵器片６点、土師質土器片６点、骨片１点の合計24点の遺物が出土している。

(2) **Ⅳａ層水田跡**（第９図）：Ⅲａ層水田跡とほぼ同一地点で、同一方向の畦が検出された。ただし、南側の畦の中央には水路が取り付いている。畦はⅢｂ層あるいはⅢｂ′層排土後に検出された。南側の畦は、作土と同一土壌が使用され、作土中の畦は区別出来ない。作土上面からの高まりは５～10cm程で、断面は台形状を呈す。畦の幅は上端で約220cm前後、作土上面では約260cm前後を測る。中央に上端幅約80cmの水路が走っており、畦はこの水路を境にして北に上端幅約90cm、南に上端幅約50cmの２本の畦に分断されている。水路は下端幅約30cmで、断面「Ｕ」字状を呈す。深さは30cm程度で、底面凹凸が激しい。堆積層は単層から成り、グライ化が著しい。北側の畦はⅣａ′層から成る。東壁断面では作土上面からの高まりはわずかしか認められないが、残存良好な部分では５cm前後の高まりを持つ。畦の上がりは、Ⅲｂ層水田跡に比べ北へ１ｍ弱後退する。東壁断面の観察ではⅢｂ層水田跡と同様の地点で同じように畦の下りらしきものがみられた。しかし西壁断面、平面調査では、これを裏付けられるような調査結果は得られなかった。作土上面は凹凸が多いが、底面は平坦である。作土の厚さは15cm前後であった。作土の下層のⅣｂ層上面には、不明瞭ながら鉄分の集積が認められる。作土の底面はⅢｂ層水田跡同様、北→南方向へ10mm／１ｍの緩やかな傾斜を示す。

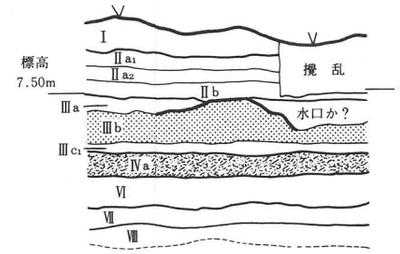
〔**出土遺物**〕作土（Ⅳａ層）からはモモの種子が１点出土したのみである。水路内堆積土からはモモの種子等の植物遺体が、Ⅳａ′層からは土師器片５点、須恵器片１点、土師質土器片７点が出土している。

４．その他の地区

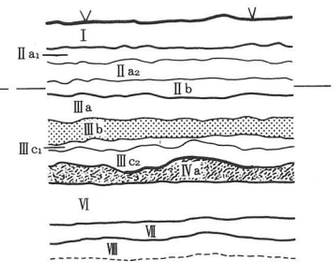
Ⅰ～Ⅲ区以外の試掘グリッド及び雨水管部分でも、Ⅲｂ層・Ⅳａ層水田跡の畦、水路、畦状の高まりが検出されている。



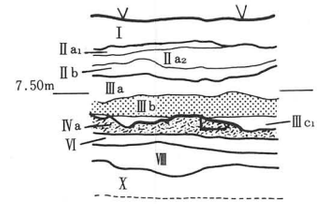
1．Ⅳa層水田跡平面図(作土上面)



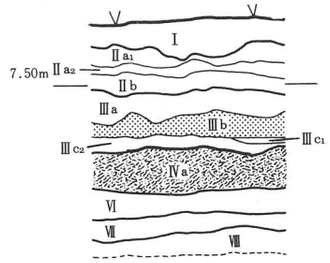
1．V－15・16グリッド北壁(Ⅲb層)



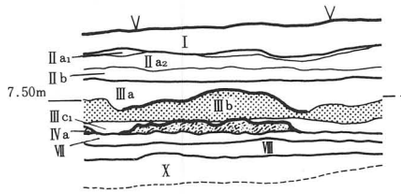
2．V－17グリッド北壁(Ⅳa層)



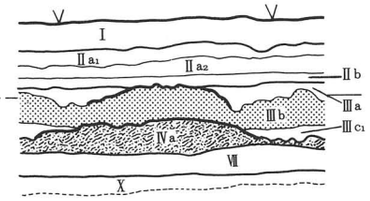
3．Y－15グリッド西壁(Ⅳa層)



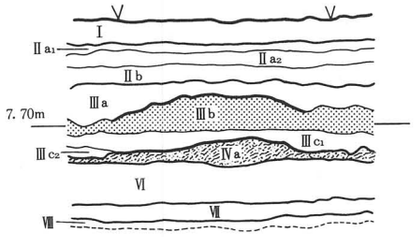
4．W－17グリッド東壁(Ⅳa層)



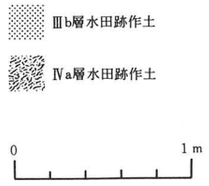
5．Z－15グリッド南壁(Ⅲb層、Ⅳa層)



6．Z－17グリッド東壁(Ⅲb層、Ⅳa層)

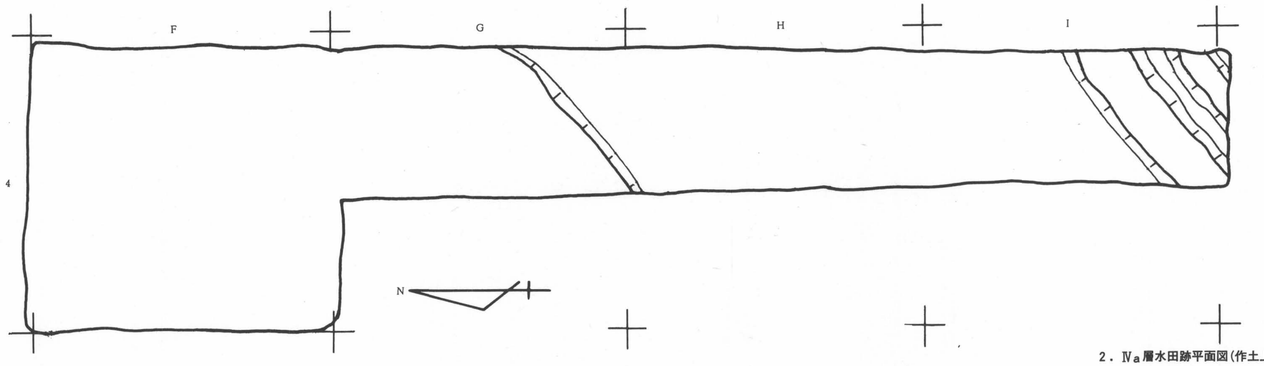


7．V－15グリッド西壁(Ⅲb層、Ⅳa層)

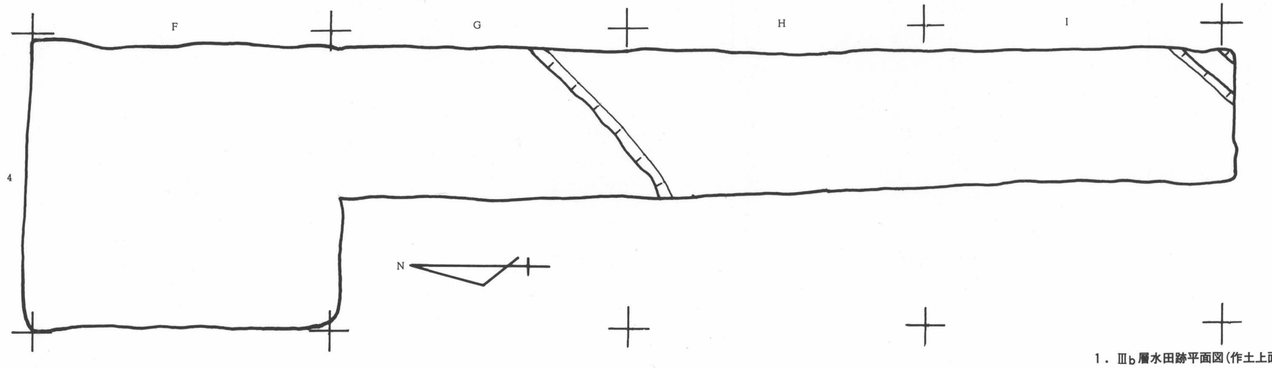


2．Ⅲb層・Ⅳa層水田跡畦断面図

第8図　Ⅱ区Ⅳa層水田跡平面・断面図



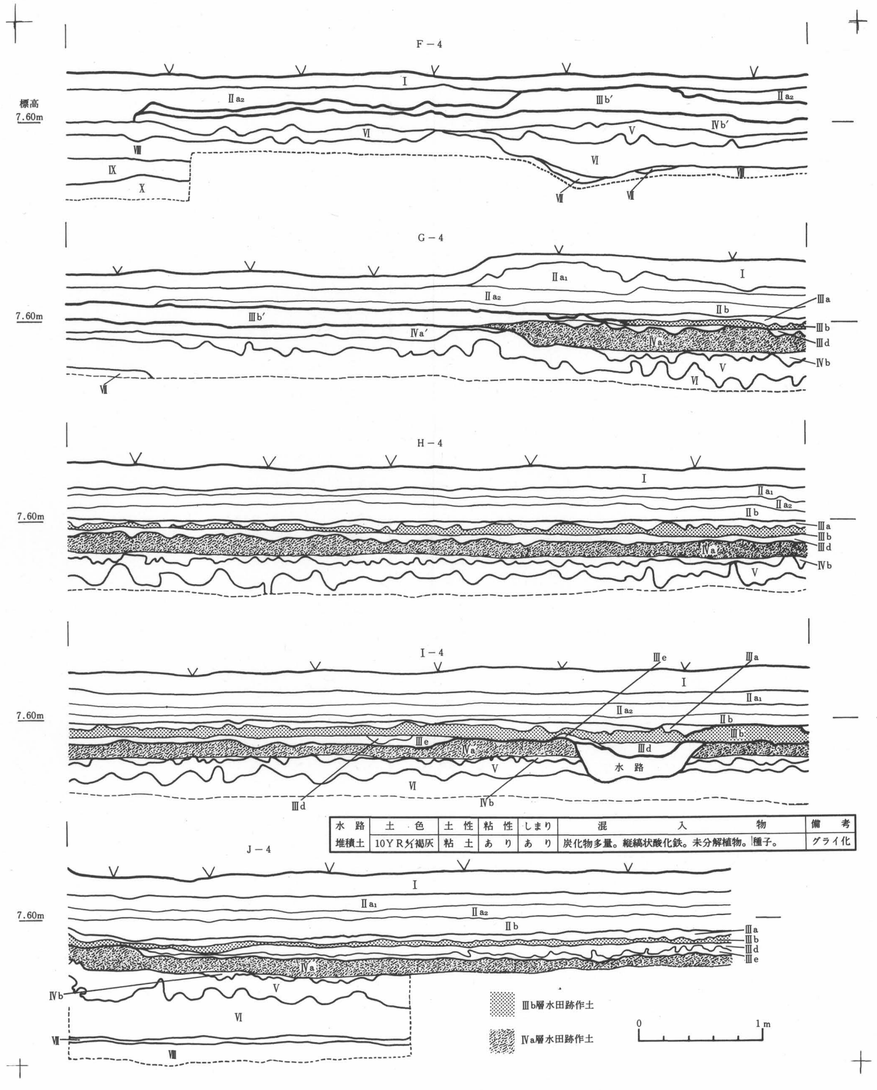
2．Ⅳa層水田跡平面図(作土上面)



1．Ⅲb層水田跡平面図(作土上面)

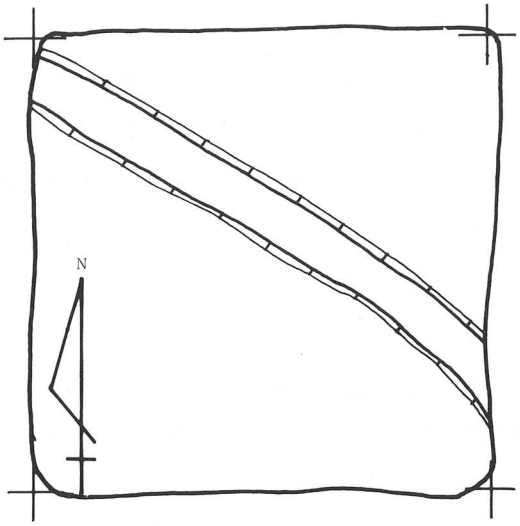
0　5 m

第９図　Ⅲ区Ⅲb層・Ⅳa層水田跡平面図・断面図

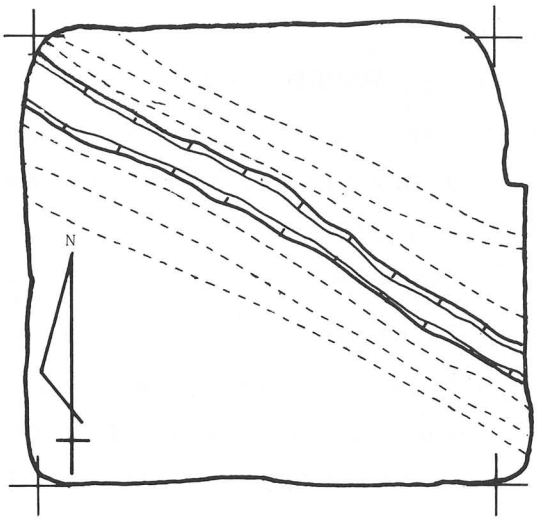


水　路	土　色	土 性	粘 性	しまり	混　入　物	備　考
堆積土	10ＹＲ4/1褐灰	粘　土	あ　り	あ　り	炭化物多量。縦縞状酸化鉄。未分解植物。團子。	グライ化

3．F～J４グリッド東壁セクション

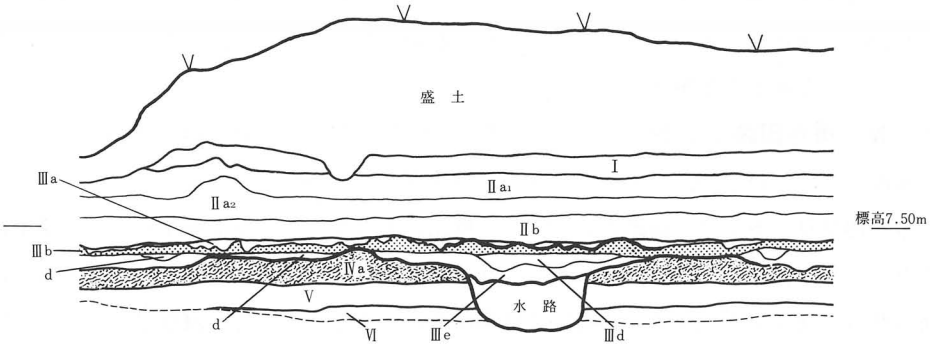


1．Ⅲb層水田跡畦平面図(作土上面)



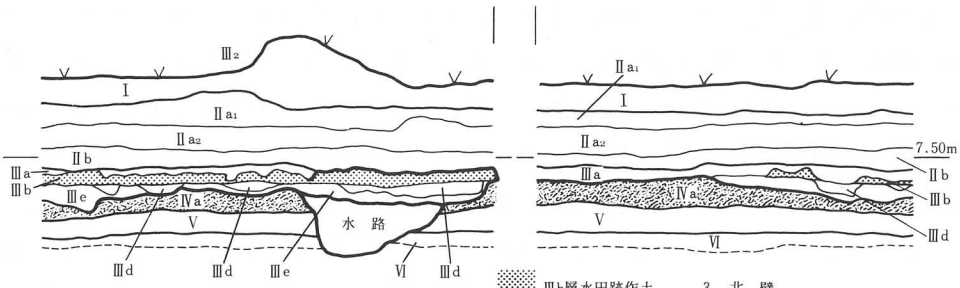
2．Ⅳa層水田跡水路畦平面図

0　5 m



1．東　壁

水　路	土　色	土　性	粘　性	しまり	混入物	備　考
堆積土	2.5Y⅔黄灰色	粘　土	あ　り	あ　り	炭化物多量。	グライ化



2．西　壁

3．北　壁

0　1 m

3．東壁・西壁・北壁Ⅲa層・Ⅳb層水田跡畦・水路断面図

第10図　O—18グリッドⅢb層・Ⅳa層水田跡平面・断面図

(1) **Ⅲｂ層水田跡**：試掘グリッドではＪ－19、Ｏ－18、Ｔ－18の３グリッドで検出された。雨水管部分では、Ｏ－15・16・17・20、Ｐ－26、Ｓ－18の各グリッドで検出された。

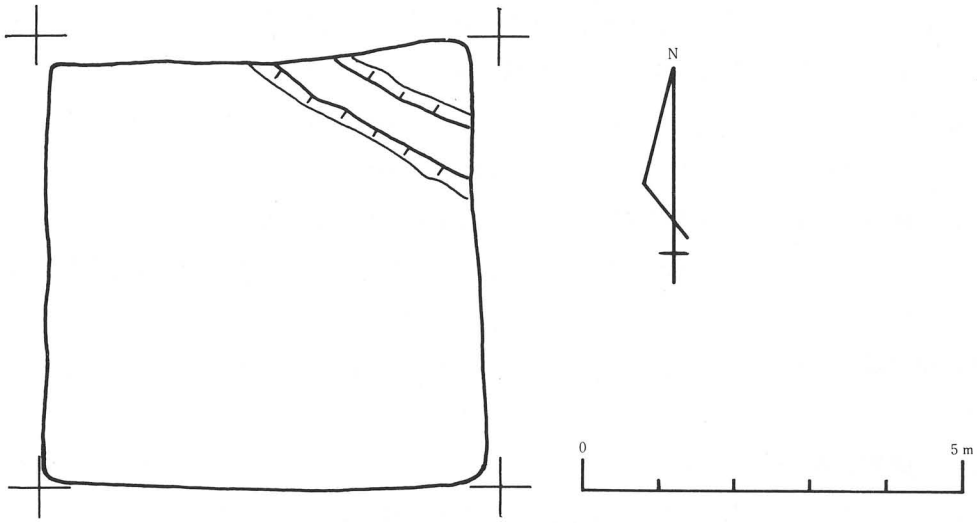
Ｊ－29グリッドでは、平面調査で畦は検出出来なかった。壁面観察によると北北東↔南南西（Ｎ－約27°－Ｅ）方向に畦が走っていたものと想定される。畦は作土上約５cmの高まりを持ち、断面形台形状を呈す。作土上の畦幅は推測値で約60cmである。**Ｏ－18グリッド**（第10図）では、西北西↔東南東方向（Ｎ－約56°－Ｗ）に畦が走る。畦は作土上面数cmの若干の高まりを持つのみである。畦作土上の断面形は台形状であるが、上面に顕著な窪みを持つ。畦幅は上端で約60cm、作土上面では約90cmである。**Ｔ－18グリッド**では、北北東↔南南西（Ｎ－約32°－Ｅ）方向に延びる幅約70cmのⅢ層の高まりを検出した。調査の関係上、検出面下に調査を進めなかった為、Ⅲｂ層水田跡の上面での確認である。狭い範囲の為、明確に畦と断定出来る材料に貧しいが、畦方向は、Ⅰ～Ⅲ区のものとほぼ一致している。その他、**Ｓ－18グリッド**（第11図３・４）で確認された畦状の高まりは、畦状の中央部に溝が走っており、これらは畦と水路として断定してもよいと考える。畦は作土上面に約10cmの高まりを持ち、断面形は台形状を呈する。畦幅は上端で約170 cm、作土上面で約200 cmを測るが、ほぼ中央部に上端幅約50cm、下端幅20cm、深さ約15cmの水路が走る。水路は断面「Ｕ」字状で底面は凹凸が激しい。堆積土はグライ化した粘土の単層である。

(2) **Ⅳａ層水田跡**：試掘グリッドではＤ－19、Ｅ－24、Ｊ－18、Ｏ－18の４グリッドで、雨水管部分では、Ｏ－20、Ｐ－26グリッドで検出された。

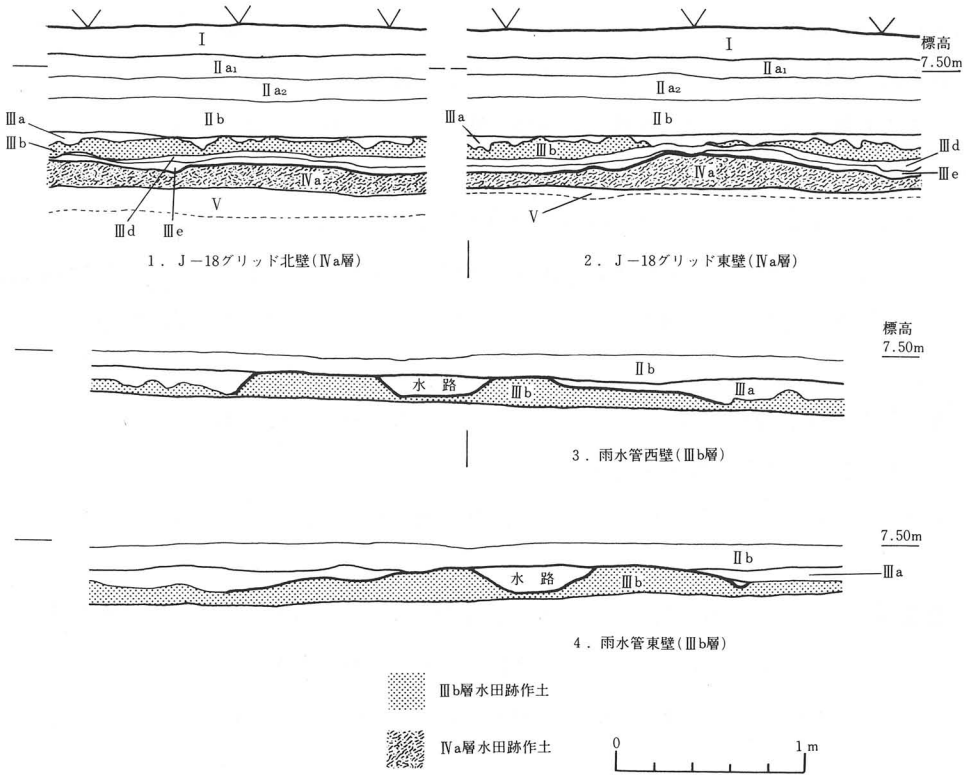
Ｄ－19グリッドでは平面調査に於いては検出出来なかった。壁面観察によると東北東↔西南西方向（Ｎ－約70°－Ｅ）に畦が走る。畦は作土上に約５cmの高まりを持ち、断面形は中央の窪んだ台形状を呈す。作土上の畦幅は推測値で約80cmである。**Ｅ－24グリッド**では北壁で検出されたのみである。作土上の高まりは約６cmである。**Ｊ－18グリッド**（第11図）では西北西↔東南東方向（Ｎ－約59°－Ｗ）に畦が走る。畦は作土上に約５～10cmの高まりを持ち、断面形は下弦の張りの弱い弧状を呈す。畦幅は上端で約50cm、作土上で約85cmを測る。畦上には鉄分の集積が顕著であった。**Ｏ－18グリッド**（第10図）では、畦と水路が検出された。しかし畦及び水路の上部は平面調査に失敗し、壁面観察に頼らざるを得なかった。畦方向は、西北西↔東南東方向（Ｎ－約58°－Ｗ）で、中央に水路が走る。畦は作土上約５cmの高まりを持ち、作土上の畦幅は推定値で約220 cmである。水路は上端幅推測値約60cmで、下端幅は約30～40cm、深さ約30cmを測る。断面「Ｕ」字状で、底面は凹凸状である。堆積土は単層で、グライ化が顕著である。雨水管部分では、３地点で畦状の高まりを検出したが、Ⅲｂ層水田跡と同様、畦の可能性を指摘出来るのみである。

以上検出されたⅢａ層・Ⅳａ層水田跡の畦、畦状の高まりは、Ⅲｂ層水田跡の場合はほぼⅢａ層上面で、Ⅳａ層水田の場合はⅢ層排土後に検出された。これら両水田跡の畦は、その作土

と同一土壌である。また、両水田跡の作土は調査地点全てで確認される。厚さはいずれも10～15cm内外である。作土の下層の上面には鉄分の集積が認められる場合があるが、Ⅳａ層水田跡に於いての方が顕著である。両水田跡からの出土遺物はない。



1．Ｊ－18グリッドⅣａ層水田跡畦平面図(作土上面)



2．Ⅲb層・Ⅳa層水田跡畦・水路断面図

第11図　Ｊ－18グリッド、雨水管（Ｓ－18グリッド）Ⅲｂ層・Ⅳａ層水田跡平面図・断面図

第Ⅳ章　出　土　遺　物

遺構及び基本層位より、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦、石製品、金属製品、ガラス製品、骨が288点出土した。ほとんどが破片資料である。その他にⅣａ層水田跡作土及び水路中より、モモの種子等の植物遺体が出土した。出土量が最も多かったのがⅡａ層で、全体の６割強を占める。Ⅲｂ層・Ⅳａ層の水田跡と水田外部分よりの出土は28点（Ⅲｂ層）、15点（Ⅳａ層）と非常に少ない。Ⅴ層以下では、わずかにⅦ層より、土師器片が１点出土したのみである。遺物では陶磁器片が圧倒的に多く、約５割を占める。

１．土師器（第12図１、写真図片13－１～５）：41点の破片資料が出土した。全てロクロ使用の内黒の坏で、内面ミガキが施こされている。底部資料で観察可能なものは全て回転糸切後無調整のものであった。

２．須恵器（写真図版13－13～20）：25点の破片資料が出土した。器種は坏、壺、甕等が認められる。甕には、外面に平行叩目が加えられるものがある。

３．土師質土器（写真図版13－６～12）：出土遺物は小破片で、しかも磨滅が激しい為、内黒の土師器以外は、明確に土師器と認定出来る材料がなく、この土師質土器に加えた。器種には、皿、炉明皿、甕、羽釜等がある。

４．陶磁器（第12図２～６、巻頭写真４～６、写真図版14～18）：138点出土した。２点の燈明皿を除き、他は破片資料である。これらは全て、Ⅲｃ層を含めた上層で出土した。産地別では、輸入品（中国）、常滑、美濃、瀬戸、志野、肥前、相馬、堤等があり、この内相馬焼が全体の約$\frac{1}{3}$を占め最も多く、次いで堤焼、肥前焼の順である。時代的には鎌倉後半から明治以後の近代のものまで認められるが、この内、幕末から明治にかけてのものが多い。Ⅱｂ層以下の出土のものは全て東北以外のもので江戸時代以前の作である。Ⅲ層以下のものはわずか２点しか出土していない。１点はⅢｃ層出土の中国産の青磁（巻頭写真４－１）で、他の１点はⅢb層水田跡作土出土の常滑産の甕（巻頭写真４－２）である。両者とも13世紀末から14世紀頃のものと考えられる。

５．瓦（第13図１、写真図版19－１）：平瓦と丸瓦の破片資料が11点出土した。全てⅡａ層を含めた上層で出土した。いずれも近世瓦である。

６．人形（第13図２、写真図版18－３～５）：Ⅱａ層より３点出土した。堤焼の人形で、全て破片資料である。

７．石製品（第13図３～５、第14図１、写真図版19－２）：４点出土した。全てⅡａ層出土である。３は硯で上下端を欠失している。両側面、裏面には摩痕が顕著に残る。4･5は厚さ0.5cm以下の扁平な石の破片で、表裏面・側面に擦痕が認められる。１は小円礫であるが、全面に磨

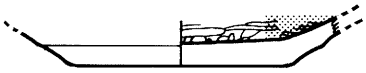
痕が認められ、表面中央部に１ケ所敲打痕が残る。

８．金属製品（第32図３～９、写真図版19－３～９）：12点出土した。全て破片資料で、Ⅱｂ層を含めた上層で出土した。２は寛永通宝で初鋳年は寛文８年である。Ⅱa_2層の出土である。４～５は煙管の一部で５は雁首部、４は吸口部である。６は刀子類の可能性がある。他は不明である。

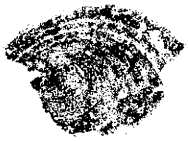
第２表　出土遺物総数量表

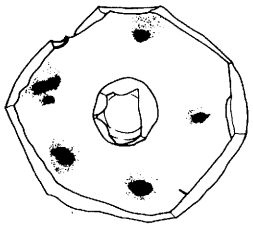
地区名		層位	土師器	須恵器	土師質土器	陶磁器											瓦	人形	石製品	金属製品	ガラス製品	骨	小計	地区合計
						青	常	唐	美	美or瀬	瀬	志	肥	相	堤	不								
	D－19	Ⅱｂ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1
	E－24	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	3	14
		Ⅱａ	2	2	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	—	1	1	—	—	9	
		Ⅱｂ	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
Ⅲ区	F－4	Ⅰ	2	2	1	—	—	—	—	—	—	—	1	5	1	1	1	—	—	1	1	—	16	58
		Ⅱa_2	6	2	2	—	—	—	—	—	—	1	—	2	1	2	2	—	—	—	—	—	18	
		Ⅲｂ′	9	3	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	17	
		Ⅳａ′	2	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	
	G－4	Ⅱa_2	2	1	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	—	—	9	22
		Ⅲｂ′	2	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	
		Ⅳａ′	3	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	
	Ⅰ－4	Ⅱa_1	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	1	1	—	8	13
		Ⅱｂ	2	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	5	
	J－5	Ⅰ	—	—	3	—	—	—	1	—	—	—	—	2	—	2	—	—	—	1	—	—	9	26
		Ⅱａ	1	—	3	—	—	—	—	—	—	—	1	4	1	—	1	—	—	—	—	—	11	
		Ⅱｂ	—	—	2	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	
		Ⅲｂ	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
Ⅰ区	Ⅰ－23	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1
	Ⅰ－24	Ⅰ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	5	1	—	—	—	—	—	9	21
		Ⅱａ	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	4	—	1	—	—	—	—	11	
		Ⅱa_1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	
	Ⅰ－25	Ⅳａ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	J－23	Ⅱａ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	2
	J－24	Ⅲｂ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2
		Ⅳ	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	F－29	Ⅱａ	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	4	4
	J－29	Ⅰ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	10
		Ⅱa_1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—	3	
		Ⅱa_2	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—	6	
	O－13	Ⅱａ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2
		Ⅱｂ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	O－18	Ⅱａ	1	—	3	—	—	—	1	2	—	—	1	10	3	2	—	—	—	2	—	—	25	32
		Ⅱa_2	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	1	—	—	—	1	—	—	6	
		Ⅶ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
	O－23	Ⅱａ	—	—	7	—	—	—	1	—	—	—	3	7	4	4	2	—	—	2	—	—	30	33
		Ⅱｂ	—	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
	P－28	Ⅱａ	—	—	2	—	—	—	2	—	—	—	4	9	1	6	1	—	—	—	1	—	26	26
	X－13	Ⅱａ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2	—	—	—	—	—	—	—	4	4
Ⅱ区	V－17	Ⅲｃ	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	W－18	Ⅲａ	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	Y－17	Ⅲｂ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	Z－18	Ⅱａ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	2	4
		Ⅱｂ	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	
表採			5	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	—	—	—	11	11
合計			41	25	55	1	2	1	9	2	1	1	17	48	19	34	11	3	4	12	3	1	290	290
層位別																								
Ⅰ			2	2	5	—	—	—	1	—	—	1	2	9	1	11	3	—	—	1	1	—	39	
Ⅱa_1			1	1	1	—	—	—	1	—	—	—	—	1	2	—	—	1	—	4	1	—	38	
Ⅱa_2			9	3	8	—	—	—	—	—	—	—	1	3	3	5	3	—	1	1	—	—	12	
Ⅱａ			5	4	19	—	—	—	4	2	1	—	12	35	13	16	5	2	3	4	1	—	126	
Ⅱｂ			2	3	5	—	1	1	3	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	2	—	—	18	
Ⅲａ			—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
Ⅲｂ・Ⅲｂ′			11	6	9	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	28	
Ⅲｃ			—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
Ⅳａ・Ⅳａ′			5	2	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	15	
Ⅶ			1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
表採			5	3	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	—	—	—	11	

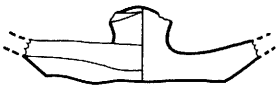
※陶磁器：青－中国産青磁、常－常滑、唐－唐津、美－美濃、瀬－瀬戸、志－志野、肥－肥前、相－相馬、不－産地不明



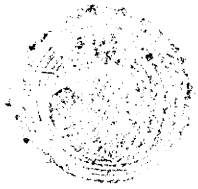
1







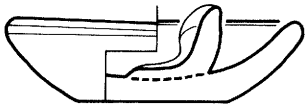
2



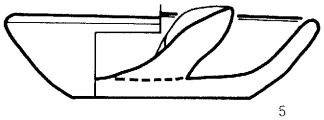
0　5 cm

番号	グリッド	層位	種類	器種	部位	写真図版
1	Ⅰ-4	Ⅱb	土師器	坏	体下半～底	13-2
外面調整		内面調整		法量cm	備考	
体：ロクロ　底：回転糸切り		ミガキ→黒色処理		底径 5.5	内外面磨滅	

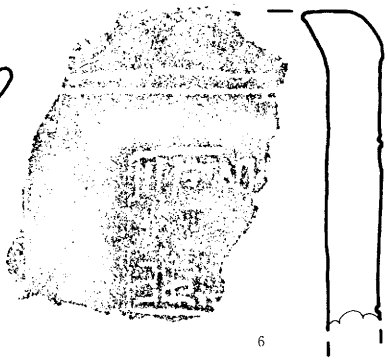
3



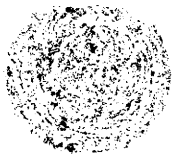
4

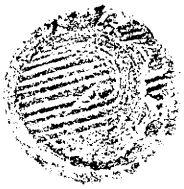


5



6

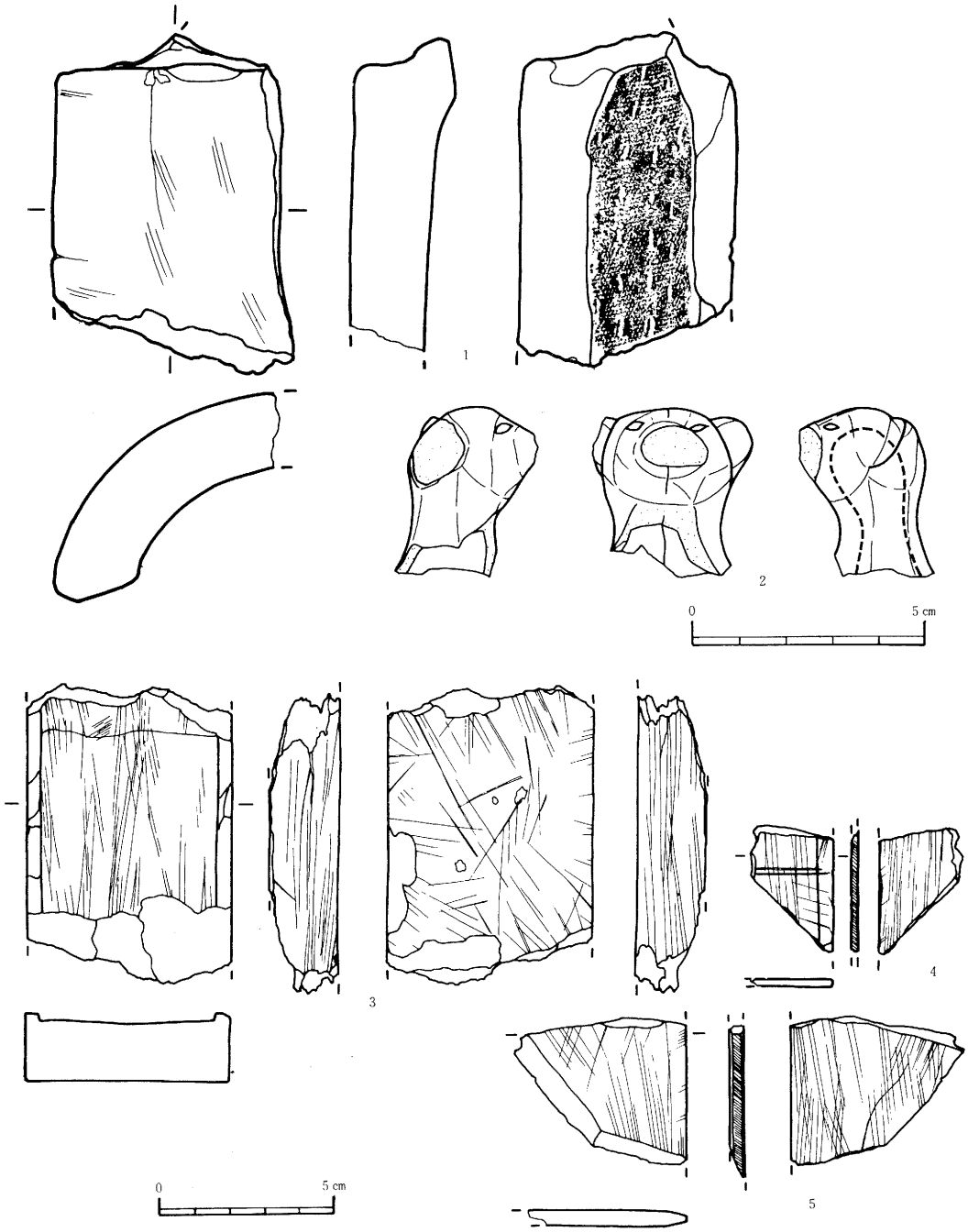




0　5 cm

番号	地区	層位	種類	器種	部位	産地	年代	外面 施釉	外面 備考	内面 施釉	内面 備考	備考	巻頭写真 写真図版
2	Ⅰ-24	Ⅰ	陶器	土瓶蓋？	体～摘	相馬	明治初期	灰釉？	白化粧後に鉄絵（山水文）、縁釉斑点。	無	回転糸切痕。	—	5-8 16-2
3	O-18	Ⅱa	磁器	碗	口縁～高台	不明	幕末？		染付（龍文）。貫入。		貫入。	残存½。	6
4	J-29	Ⅱa₁	陶器	燈明皿	口縁～底	堤	幕末～明治	鉛釉	底面回転糸切痕。	鉛釉	芯受け有り。	完形。	18-1
5	Ⅰ-24	Ⅱa₁	陶器	燈明皿	口縁～底	堤	幕末～明治	鉛釉	底面回転糸切後条痕。	鉛釉	芯受け有り。	口縁一部欠失。	18-2
6	O-18	Ⅱa	陶器	鉢？	口縁～体	不明	幕末～明治？	無	三河名□□□□□ 山岡□□の刻印有り。	無		三河産の可能性有り。	17-12

第12図　出土遺物（土師器・陶磁器）

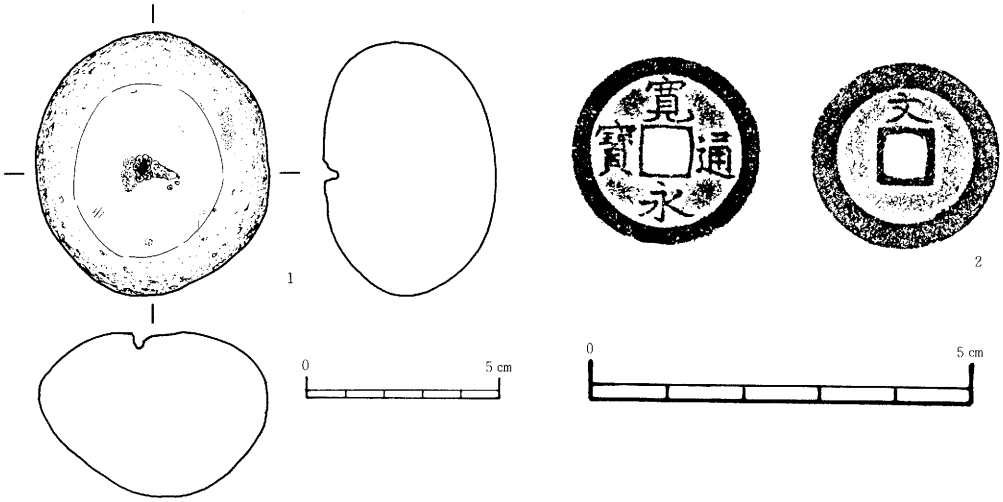


番号	地区	層位	種類	凸面調整	凹面調整	備考	写真図版
1	E－24	Ⅰ	丸瓦	縦位ナデ	布目	燻し瓦。	19－1

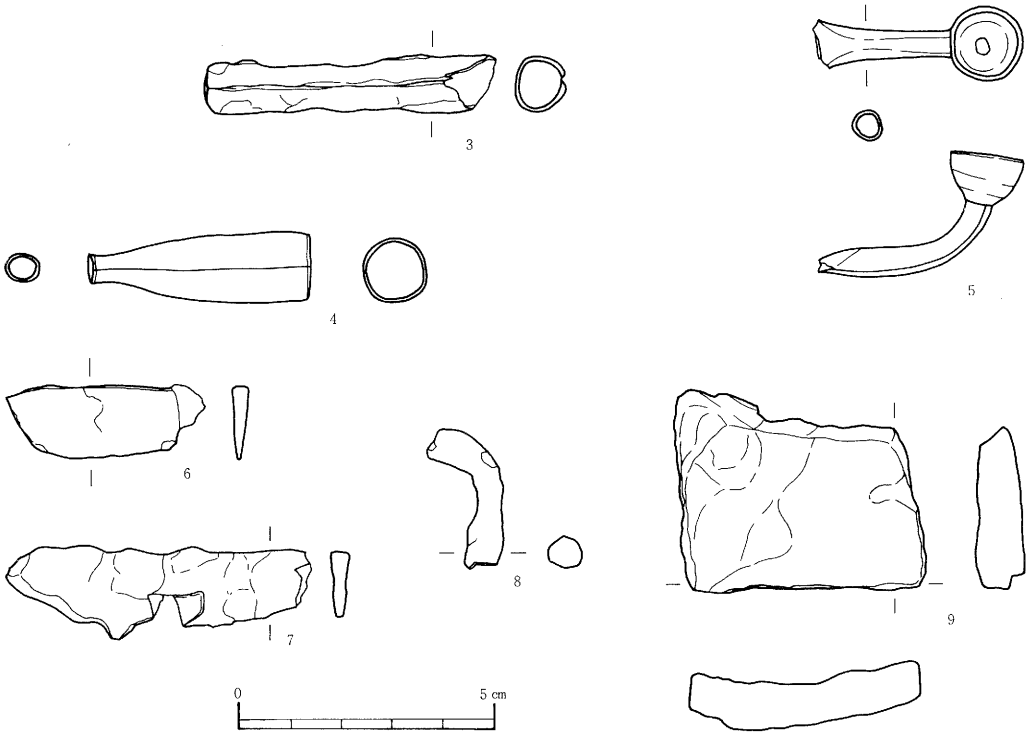
番号	地区	層位	種類	部位	産地	年代	備考	写真図版
2	F－29	Ⅱa	人形	頭	堤	幕末～明治	犬？	18－3

番号	地区	層位	種類	部位	法量cm ( )内は残存値 長さ	幅	厚さ	石質	備考	写真図版
3	Z－18	Ⅱa	硯	陸部	(8.0)	5.8	2.0	スレート	長方硯。側面垂直。周縁1段。裏面・両側面擦痕。	19－2
4	J－23	Ⅱa	石製品	—	(3.3)	(2.2)	0.15	スレート	表裏面・側面擦痕。	—
5	G－4	$Ⅱa_2$	石製品	—	(4.0)	(4.9)	0.4	スレート	表裏面・側面擦痕。	—

第13図　出土遺物(瓦・人形・石製品1)



番号	地区	層位	種類	部位	法量 cm 長さ	幅	厚さ	石質	備考	写真図版
1	E－24	Ⅱa	石製品	—	6.9	6.1	4.7	安山岩	全面に磨痕。表面中央に高支打痕。	—
番号	地区	層位	種類	銭名	初鋳年（西暦）			素材	備考	写真図版
2	O－18	Ⅱa₂	古銭	寛永通寶	寛文8年（1668）			銅	新寛永銭。正字文。	19－3



番号	地区	層位	種類	部位	法量cm（）内は破存値 長さ	幅(径)	厚さ	材質	備考	写真図版
3	O－18	Ⅱa	金属製品	—	(5.7)	1.1	—	鉄	管状。	—
4	O－23	Ⅱa	煙管	吸口	4.5	1.25	—	銅？	吸口端部径0.5cm。	19－7
5	I－4	Ⅱb	煙管	雁首	(4.1)	0.5	—	銅？	火皿外径1.2cm。	19－8
6	D－19	Ⅱb	刀子？	刃～茎？	(4.0)	1.5	0.3	鉄	刃区有り。	19－6
7	I－4	Ⅱa₁	金属製品	—	(6.1)	1.8	0.2～0.4	鉄	下端中央部に抉り。	19－5
8	O－23	Ⅱa	金属製品	—	2.8	0.5	—	鉄	「L」字状に曲る。断面円形。	19－4
9	J－29	Ⅱa₁	金属製品	—	4.0	4.5	1.0	鉄	板状。やや弯曲。	19－9

第14図　出土遺物（石製品2・金属製品）

第Ⅴ章　考察とまとめ

1．検出遺構の所属年代

(1)　**Ⅲb層水田跡:** 作土（Ⅲｂ層）及び水田外部分（Ⅲb′層）より28点の出土遺物がかあった。内訳は、土師器２点、須恵器６点、土師質土器５点、陶器１点、骨１点で、全て細片である。この内、所属時期が比較的明確で、最も新しいものとしては、陶器片が１点上げられる。この陶器片（巻頭写真４－２）は、常滑産の甕の体部資料で、鎌倉後半から南北朝頃のものと考えられる。次にⅢｂ層水田跡を挟む上下層の出土遺物をみてみたい。下層であるⅢｃ層からは、わずか１点ではあるが中国産の青磁片が出土している。この青磁（巻頭写真４－１）は、竜泉窯系のもので、輸入年代は、Ⅲｂ層出土の陶器片とほぼ同じ頃と考えられる。上層のⅢａ層では、須恵器片１点出土したが、下層からの混入遺物である。さらに上層のⅡｂ層では、最も新しい時期のものとしては、江戸時代初頭、あるいは後半（写真図版15－２）頃の陶磁器片が出土しており、当層は、近世頃の形成層と捕えられる。従って、Ⅲｂ層水田跡の所属年代は、鎌倉時代後半～南北朝以降から近世に至らない時期、すなわち中世後半に位置づけられる。

(2)　**Ⅳa層水田跡:** 作土（Ⅳａ層）及び水田外部分（Ⅳa′層）より15点の出土遺物があった。内訳は、土師器５点、須恵器２点、土師質土器８点で、全て細片である。土師質土器としたものの内には、平安時代末、あるいは中世にずれ込みそうな可能性のあるものもあるが、細片のため明確に言及できない。これを挟む上下層の内、下層では、Ⅶ層で（Ⅳｂ～Ⅵ層まで無遺物）ロクロ使用の土師器の坏が１点出土したのみである。このⅦ層には、10世紀前半の降下とされる灰白色火山灰[註]が含まれている。上層では、前述Ⅲｃ層より鎌倉時代後半から南北朝頃の青磁片が出土している。従って、Ⅳａ層水田跡の所属年代は、平安時代後半より中世前半頃までの年代が与えられるが、上限の時期に関しては、より新しくなる可能性もある。

(3)　**その他:** Ⅲａ層上面で土壙が３基検出されている。いずれも出土遺物はない。この土壙の所属年代を考える前に、Ⅱａの年代について触れておきたい。Ⅱａ層はa_1・a_2に分層される。陶磁器片の年代、ガラス製品(全て明治以降)の有無により、a_2層は幕末から明治、a_1層は明治以降よりⅠ層が形成されるまでの年代が与えられる。さて、３基の土壙であるが、いずれもⅡ区で検出され、堆積土は互いに酷似している。このことより３土壙は、ほぼ同時期のものと考える。また、堆積土の状況より、人為的に埋め戻されたことが想定される。Ⅱ区の調査に際しては、Ⅲｂ層水田跡検出に重点を置いたため、Ⅲａ層上面までの排土は重機により行った。従って、これら土壙は、Ⅲａ層形成以降のどの時期に属するかは明確にすることができなかった。

註：東北大学農学部山田一郎氏より、多賀城跡出土の灰白色火山灰と同一のものであるとの御教示を得た。白鳥良一氏は、この灰白色火山灰の降下年代を10世紀前半頃としている。白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡研究所 1980

2．水田跡について

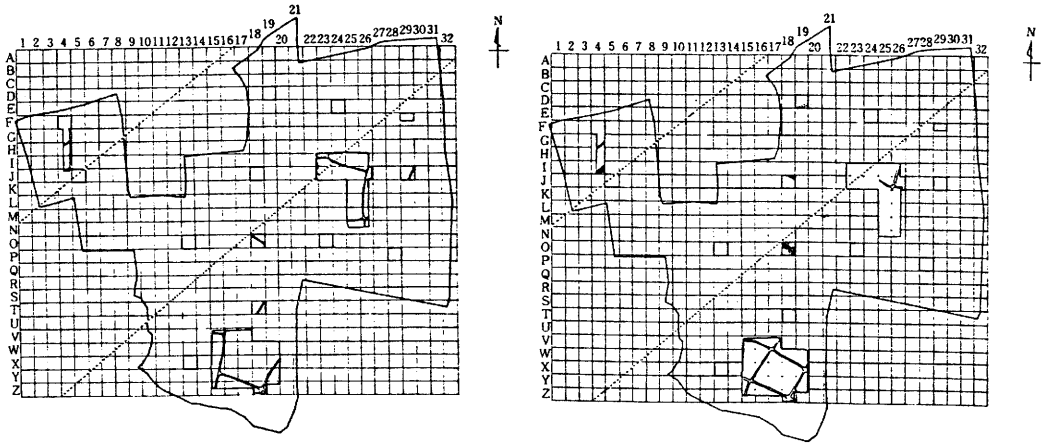
Ⅲｂ層水田跡とⅣａ層水田跡の畦、水口、１区画、作土、水路の特徴を比較した場合（第３表)、多くの共通点が認められる。相違点としては1.畦の断面形、高さ、交点　2.１区画の面積3.水路の方向、規模が上げられるが、この内の幾つかは、堆積状況、調査面積に起因するものと考えられる。相違点の内、畦の交点に関しては、Ⅳａ層水田跡が５例全て「十」字状であるのに対し、Ⅲｂ層水田跡は６例中１例が「十」字状で、他は全て「Ｔ」字状となっている。Ⅱ区の一部では、Ⅳａ層水田跡の畦上にⅢｂ層水田跡の畦が重なりながらも、交点（同一位置）では、異なる畦の取り付き方となっている。これは両水田跡の１区画の形状（規格)、面積に大きな影響を与えたものと考える。ただし、今回の調査では、Ⅳａ層の水田跡で１区画のみが明確にされただけであり、現状では両者の１区画の形状、面積に関しては、余り多くは語れない。しかし、畦交点の差異から、下層の水田跡の方が上層の水田に比べ整然とし、尚且つ１区画の面積も小さかったことが推測される。仙台市南東部に位置する後河原遺跡[註]では、中世（後半）に位置づけられる水田跡が検出されている。この遺跡では、水田１区画の明確な規模は把握できなかったが、長辺、短辺、あるいはどちらか一辺の判る例としては、全て16ｍ以下であった。これに比べると当遺跡は、両水田跡とも１辺の長さが大きい。また、Ⅱ区では両水田跡とも作土底面が緩やかではあるが傾斜している。もし、水田の耕作深度が同一のものと仮定するならば、両水田跡の検出区画内に水を均一に張ることは、並大抵のことではなかったと思われる。このような状況を踏まえると、当時、この１区画内にさらに細い小区画を設けていたことも考えられる。

第３表　Ⅲｂ層水田跡とⅣａ層水田跡の比較

水田細部 ＼ 水田名			Ⅲｂ　層　水　田　跡	Ⅳａ　層　水　田　跡
畦	方向	A	北↔南～北東↔南東（**北北東↔南南西**が中心） Ｎ－5°～47°－Ｅ	北↔南～東北東↔西南西（**北北東↔南南西**が中心） Ｎ－16°～70°－Ｅ
		B	西↔東～西北西↔東南東 Ｎ－56°～96°－Ｗ	西北西↔東南東 Ｎ－58°～72°－Ｗ
	土壌		作土と同一	作土と同一
	断面形		**台形状**。下弦の張りの少ない弧状。	台形状。**下弦の張りの少ない弧状**。
	規模	作土上の高さ	０～10cm前後（**約10cm**）	０～10cm（**約５cm**）
		上端幅・作土上幅	約30～60cm（**約40cm**）・約75～90cm（**約80cm**）	約50～70cm（**約50cm**）・約80～90cm（**約80cm**）
	交点		**「Ｔ」字状**。「十」字状。	「十」字状
水口	位置		畦交点付近	畦交点付近
	底面の高さ		未掘のため不明	作土上面より高いものと低いものがある
１区画	形状		方形状	正方形状
	１辺の規模		約18・20m	約18m
	面積		約400㎡以上（Ⅱ区）	約300㎡
作土	厚さ		15cm前後	15cm前後
	底面状態		ほぼ平坦	ほぼ平坦
	底面傾斜		Ⅱ区　南南西→北北東に緩やかな下り傾斜 Ⅲ区　北→南に緩やかな下り傾斜	Ⅱ区　南南西→北北東に緩やかな下り傾斜 Ⅲ区　北→南に緩やかな下り傾斜
	作土下鉄分集積		部分的に有り	部分的に有り
水路	方向		畦Ｂ方向	畦Ａ・Ｂ両方向
	取り付き部分		畦中央	畦中央
	規模	上端幅・下端幅	約50cm・約20cm	約60～80cm・約30～40cm
		深さ	約15cm	約30cm
	断面形		「Ｕ」字状	「Ｕ」字状
	底面状態		凹凸状	凹凸状

※太文字のものは、その内でも最も多く中心的なものである。
畦は便宜上、南北方向を基調とするものをＡ、東西方向を基調とするものをＢとした。

第15図１・２の破線内は、砂礫層（Ⅺ層）の深度が増す部分を想定したラインである。このラインは、旧河道面（写真図版１－１）とほぼ一致し、旧河道面と砂礫層の低下は相関関係にあり、当遺跡の砂礫層の低下部分が旧河道方向と考える。この旧河道方向と両水田跡の畦方向は、ほぼ平行、あるいはほぼ直交方向となっており、下層Ⅳａ層水田跡においてはより顕著である。これは下層の水田跡ほど地形的制約を受け、あるいは逆にそれを利用し水田の畦方向が決定されたものと考える。また、調査区北西端のⅢ区では、両水田跡とも水田外部分が認められており、水田域が両水田経営期間内には広域に拡がっておらず、旧河道面に沿って拡がっていたことが想定される。このような畦方向、水田域のあり方は、前述後河原遺跡とよく似ているといえる。従って、当時の水田の畦方向、水田域のあり方は、その時代の地形的条件により、大きく左右されていたものと考える。



1．Ⅲｂ層水田跡　　2．Ⅳａ層水田跡

第15図　砂礫層低下想定ライン

3．ま　と　め

1．欠ノ上Ⅰ遺跡は、名取川・広瀬川に挟まれた、標高7.5～8ｍの後背湿地に立地する。

2．検出遺構には、平安時代後半～中世前半の水田跡、中世後半の水田跡、中世後半以降の土壙３基がある。

3．両水田跡とも１区画が大きく、さらに内に小区画が設けられたことも考えられる。また、水田１枚の形状は不明な点が多いが、畦の取り付き方より下層の水田跡（Ⅳａ層）の方が上層の水田跡（Ⅲｂ層）に比べ整然としていたことが推測される。

4．両水田跡の畦方向、水田域のあり方が旧河道面と相関関係を示すことより、両水田跡の畦方向、水田域が、地形的条件によって制約を受けていたことが窺える。

註：佐藤甲二「後河原遺跡」仙台市文化財調査報告書第71集　1984

付章　仙台：欠ノ上Ⅰ遺跡土壌のプラント・オパール分析

大分短期大学　　佐々木　　章
宮崎大学　　藤原宏志

1．はじめに

青森県垂柳遺跡で水田趾が検出され、弥生時代に入ると東北地方にも水田イナ作が伝わっていたことが明らかとなった。その後、仙台市富沢水田遺跡でも弥生時代の水田趾が検出されるなど東北地方の水田イナ作についての知見が増えつつある。今回、富沢水田遺跡を流れる笊川の下流域で、名取川と広瀬川の合流点に近い欠ノ上Ⅰ遺跡土壌のプラント・オパール分析の機会を得たので結果を報告する。

2．プラント・オパール分析法

分析に用いる機動細胞プラント・オパールは、イネ・ヨシ・タケなどイネ科植物の葉身中に存在する珪化機動細胞に由来する土粒子である。そのため埋没水田土層中には、そこで生産されたイネに由来するイネ機動細胞プラント・オパールが多量に含まれている。土壌中のプラント・オパール密度を求める手順を第16図に示す。プラント・オパールは分解しにくく、植物体中の珪化機動細胞量もほぼ定まっているので（第４表）、土壌中のプラント・オパール量を植物体量に換算することができる。

3．分析結果・考察

遺跡土壌中の機動細胞プラント・オパール密度を植物体量に換算した結果を第17・18図に示す。結果は面積10ａ、厚さ１cmの土壌中に含まれる機動細胞プラント・オパールに相当する植物体の地上部乾燥重量（ｔ）で示してあり、年間収量ではない。

当時穂刈が行なわれており、土壌の移動なかったとすれば葉身だけにある珪化機動細胞の全量がその土層中に残されていることになるので、分析結果は生産された植物体の地上部乾重に相当する。イネについては、生産されたであろう籾量も合わせ示した。

層位ごとの推定年代はⅡｂ層が江戸時代、Ⅲｂ層が中世後半、Ⅳａ層が平安後半から中世前半の水田層で、Ⅶ層には平安中期頃の灰白色火山灰が含まれるとの事である。

Ｐ－28地点ではⅦ層までイネ機動細胞プラント・オパールが検出され、Ⅰ層以外にⅡｂ層とⅣａ層にピークが認められる。Ⅱｂ層全体中のイネ機動細胞プラント・オパールは、8.0ｔ/10ａのイネ籾を生産できるイネ量に相当する。Ⅲｂ層では1.1ｔ/10ａ、Ⅳａ層では1.9ｔ/10ａの籾量に相当する。Ⅰ層からⅦ層までを合計すると41.0ｔ／10ａになる。ヨシはⅥ層・Ⅲａ層・Ⅱａ層などで検出されるが、タケ亜科も全層にわたって検出されている。比較的に水分の多い環境であったと考えられる。

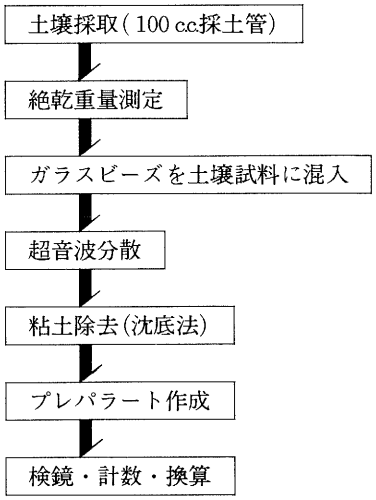
E－24地点ではⅡａ層で2.9ｔ/10ａ、Ⅱｂ層で3.3ｔ/10ａの籾に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。この地点では、ヨシも検出されない。かんがい水にたよる乾田であった。

J－5地点ではⅧ層から、ごく少量のイネ機動細胞が検出されている。近所でイネが栽培されていたであろう。イネのピークはⅡｂ層、Ⅲｅ層、Ⅴ層に認められる。Ⅱｂ層では24.2ｔ/10ａ、Ⅲ層全体で5.3ｔ/10ａ、Ⅳａ層で2.3ｔ/10ａ、Ⅴ層で5.5ｔ/10ａの籾に相当する。全層を合計すると83.2ｔ/10ａになる。ヨシ属機動細胞プラント・オパールは、Ⅰ、Ⅱａ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ層などで検出されている。タケ亜科機動細胞プラント・オパールは、全層にわたって検出されるので、低湿地とはいえないが、比較的に水分の多い環境であった。Ⅴ層を使って水田イナ作を始めたとすると、当時、湿田に近い状態であったのかもしれない。Ⅳａ層は、ごく近所で水路や畦畔が検出されている。Ⅱｂ層になるとイネも急に増加し、ヨシも検出されない。この時期には乾田化がすすんでいたことを示している。

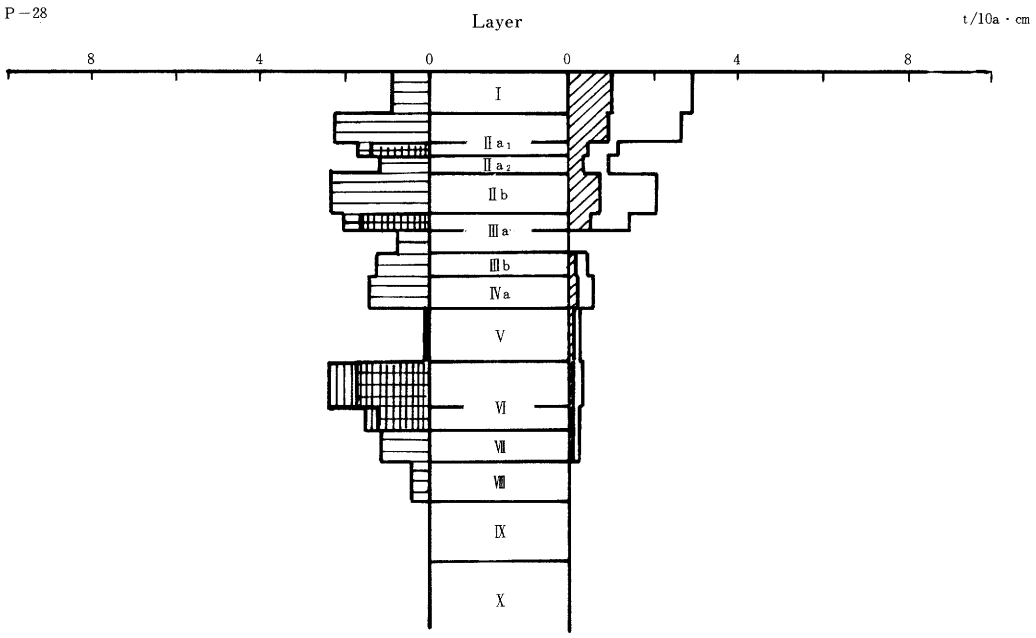
Z－18地点では、Ⅱｂ、Ⅲｂ層にイネのピークが見られ、それぞれ8.9t/10a、7.1t/10aの籾に相当する。Ⅲｂ層までの合計は45.3t/10aになる。Ⅳａ層では畦畔が検出されているにもかかわらず、イネ機動細胞プラント・オパールは検出されない。ヨシが全く検出されないので、かんがいをしなければ水田にはできない環境である。苦労して水田にはしたものの、イネは育たなかったのであろうか。今回分析している間にキビ族の機動細胞に類似したプラント・オパールを検出した。Ⅰ、Ⅱa_2、Ⅱｂ、Ⅲｂ、Ⅳａなどに多い。キビ族植物の機動細胞の細分は、研究中で詳らかでないので同定できない。しかし、キビ族にはキビ・アワ・ヒエなど雑穀類が含まれている。同定のための研究を急ぎたい。その結果によってはヒエ田の可能性を考慮する必要があろう。

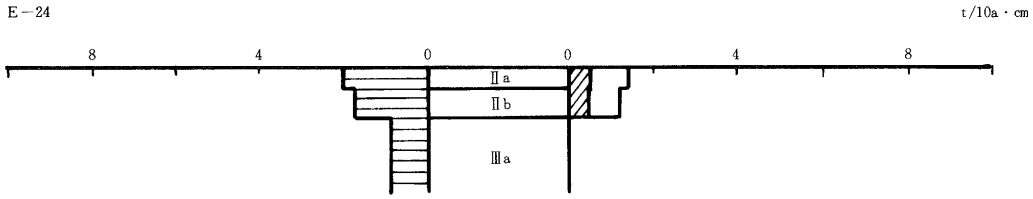
		×10^4個/g
イネ	*Oryza sativa*	3.40
ヨシ	*Phragmites communis*	1.44
ヒエ	*Echinochloa Crus-galli*	0.233
ゴキダケ	(*Bambusaceae*)	20.83
ススキ	*Miscanthus sinensis*	2.79

第４表　植物体中の珪化機動細胞

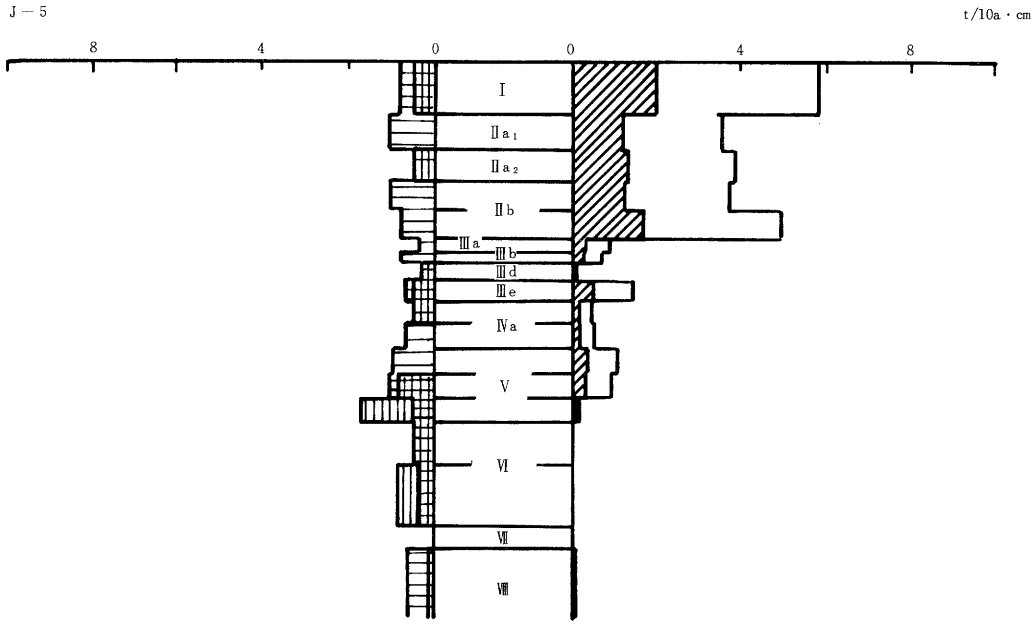


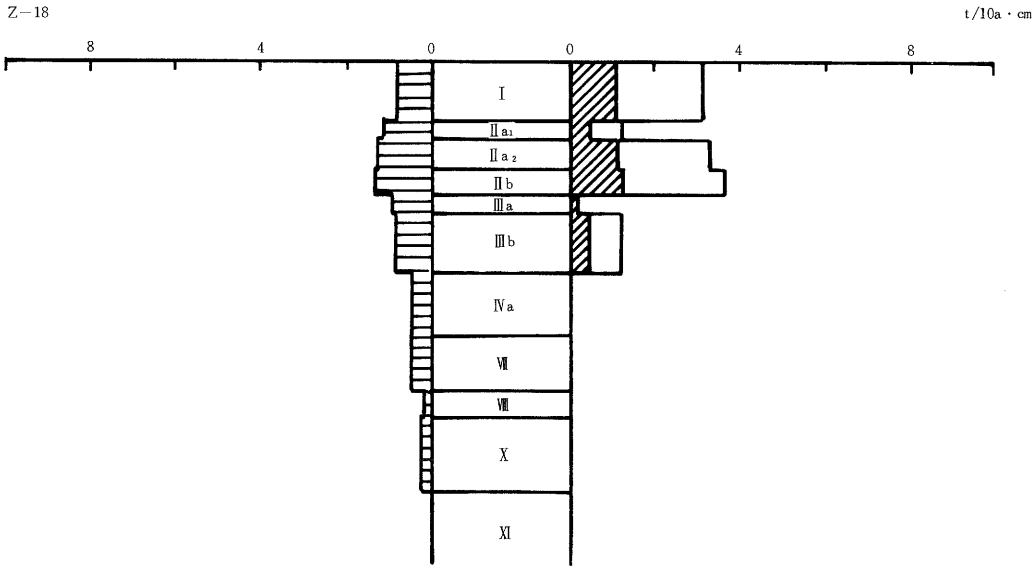
第16図　プラントオパール定量分析手順





第17図　プラント・オパールから推定した植物体量(1)





第18図　プラント・オパールから推定した植物体量(2)

以上の結果を総合して考えると、比較的に水分の多いＰ－28やＪ－５地点では、平安時代中期前後頃に水田イナ作が行なわれ始め、平安後半～中世前半にはほぼ安定したのであろう。この時期までにＰ－28地点で6.5t/10a、Ｊ－５地点で8.7t/10a、平均7.6t/10aの籾に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが蓄積している。当時穂刈が行なわれていたとすると、これはイネ籾の収量の合計にあたる。株刈であれば、機動細胞を含む葉身は、穂と共に圃場外に持ち出されるので、プラント・オパールとして残るのは一部にすぎない。この場合、実際の収量は約20倍の150ｔ/10ａ程度という事になる。堆肥などとして圃場にもどしておれば、その中間的な収量という事になる。

中世後半ころにかけてＺ－18地点でも水田イナ作が始まる。Ⅲ層全体で平均5.5ｔ/10ａの籾に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが蓄積した。株刈だと110ｔ/10ａということになる。

江戸時代になると引き続き全域で水田が作られた。Ⅱｂ層だけで平均11.1ｔ/10ａの籾に相当する。株刈だと220ｔ/10ａになる。

幕末から明治にかけてのⅡa_2層では平均6.5ｔ/10ａであり、株刈なら130ｔ/10ａの収量と推定できる。

明治以降、Ⅰ、Ⅱa_1層の合計は平均27.9ｔ/10ａとなる。株刈なら558ｔ/10ａと推定できる。

このような例を多数集めていく事によって地方ごとの収量の変遷や栽培管理方法の変遷などを明らかにすることができよう。

4．結　　論

欠ノ上Ⅰ遺跡土壌のプラント・オパール分析を行なった結果、

1）比較的に水分の多いＰ－28、Ｊ－５地点付近で平安中期前後頃にイナ作が始まった。平安後半～中世前半までに7.6ｔ/10ａの籾を生産するに足るプラント・オパールが蓄積された。株刈であれば150ｔ/10ａの籾が生産されていよう。

2）中世後半は、乾燥したＺ－18地点でも水田作が始まった。プラント・オパール量を籾に換算すると5.5ｔ/10ａに相当する。株刈だと110ｔ/10ａになる。

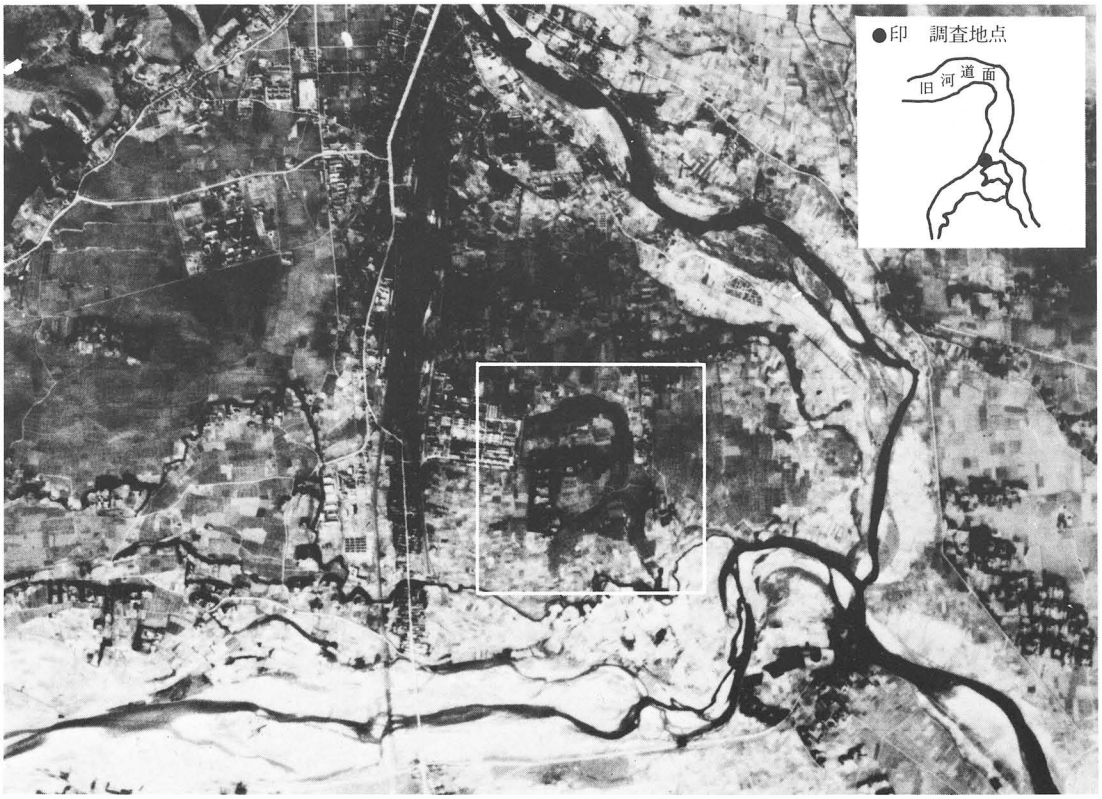
3）江戸時代には引き続き全域で水田が作られた。籾に換算すると11.1ｔ/10ａになり、株刈では220ｔ/10ａと推定できる。

4）幕末から明治にかけては6.5ｔ/10ａ、明治以降で27.9ｔ/10ａに相当する。株刈ではそれぞれ130ｔ/10ａ、560ｔ/10ａになる。

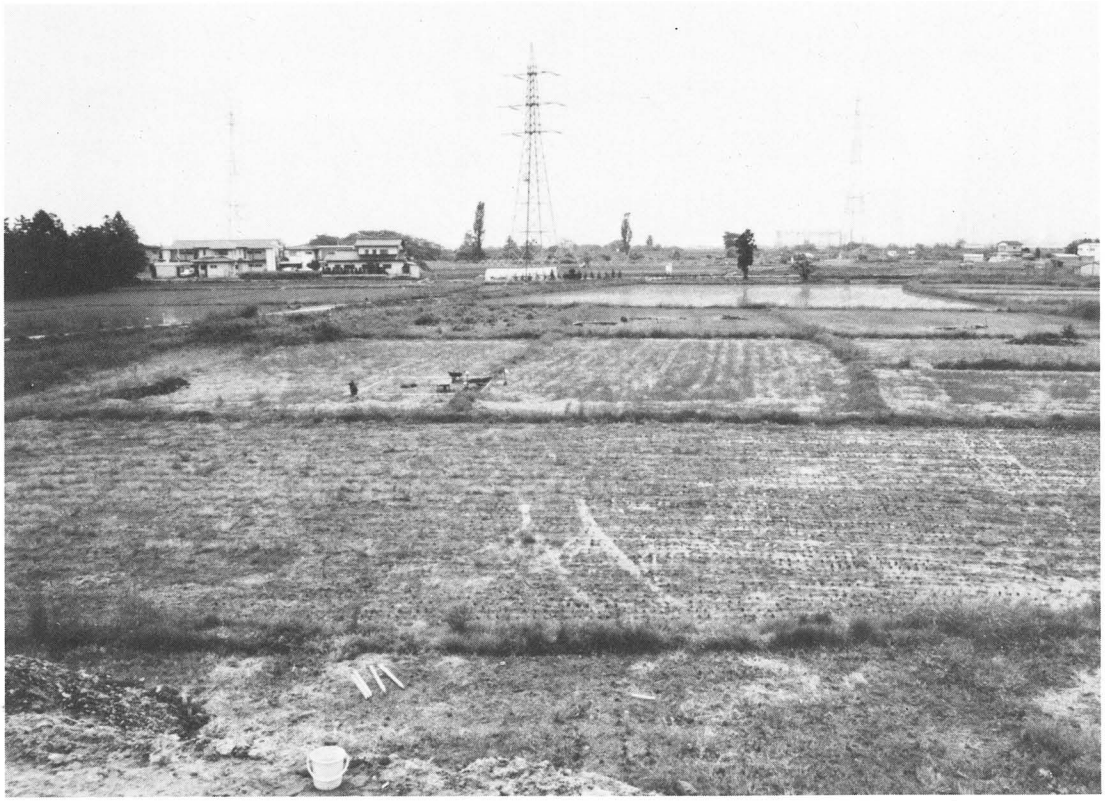
5）Ｚ－18地点のⅣａ層では畦畔が発掘されているにもかかわらず、イネ機動細胞プラント・オパールは検出されていない。しかしキビ族植物の動機細胞類似プラント・オパールが検出される。属・種レベルの同定はできていないが、ヒエ田の可能性も考慮する必要がある。

6）今後、このような例を集めていく事によって地方ごとの水田イナ作史を解明する手がかりを得ることができる。

写　真　図　版



1．欠ノ上Ⅰ遺跡周辺の航空写真（昭和22年）



2．調査対象区全景１―東側―(北から)

写真図版１　遺跡全景１

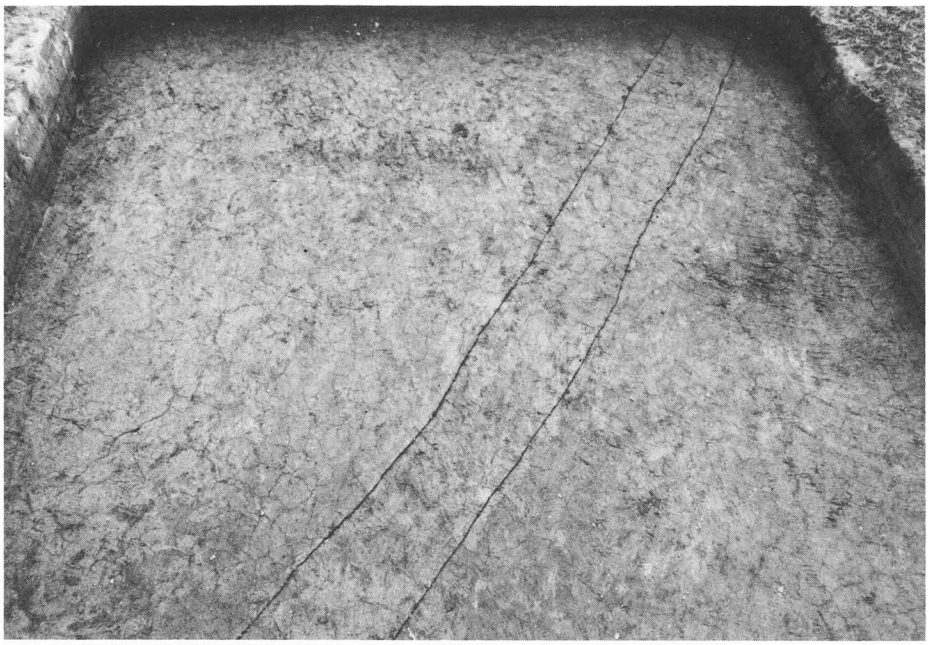
1．調査対象区全景２―西側―(北東から)

2．Ｐ―28グリッド南壁断面

写真図版２　遺跡全景２・基本層位

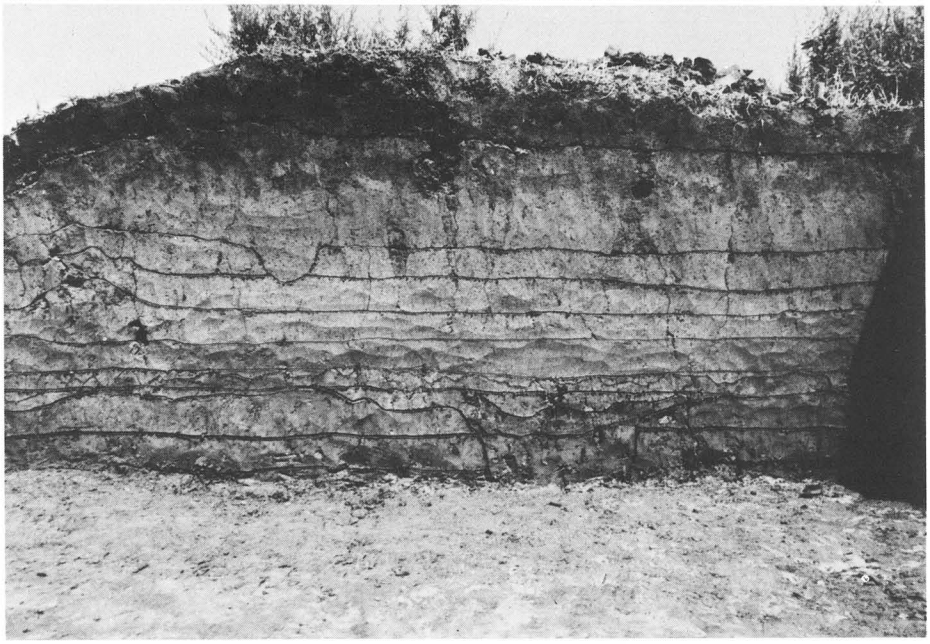
写真図版 3

O－18グリッド検出遺構



1．Ⅲｂ層水田跡畦検出状況
（東から）

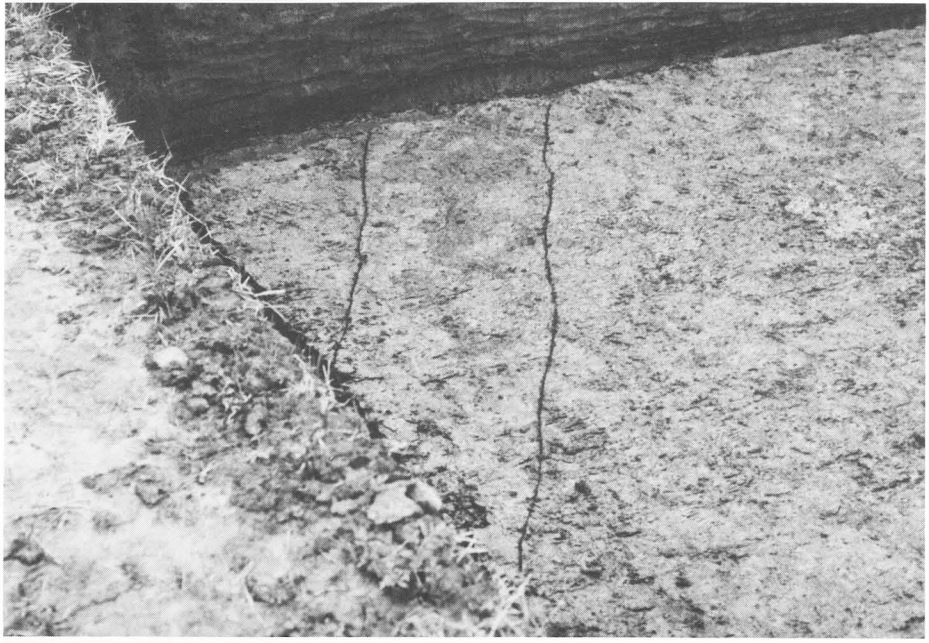
2．Ⅳａ層水田跡水路
（北から）



3．Ⅲｂ・Ⅳａ水田跡
畦・水路断面（東壁）

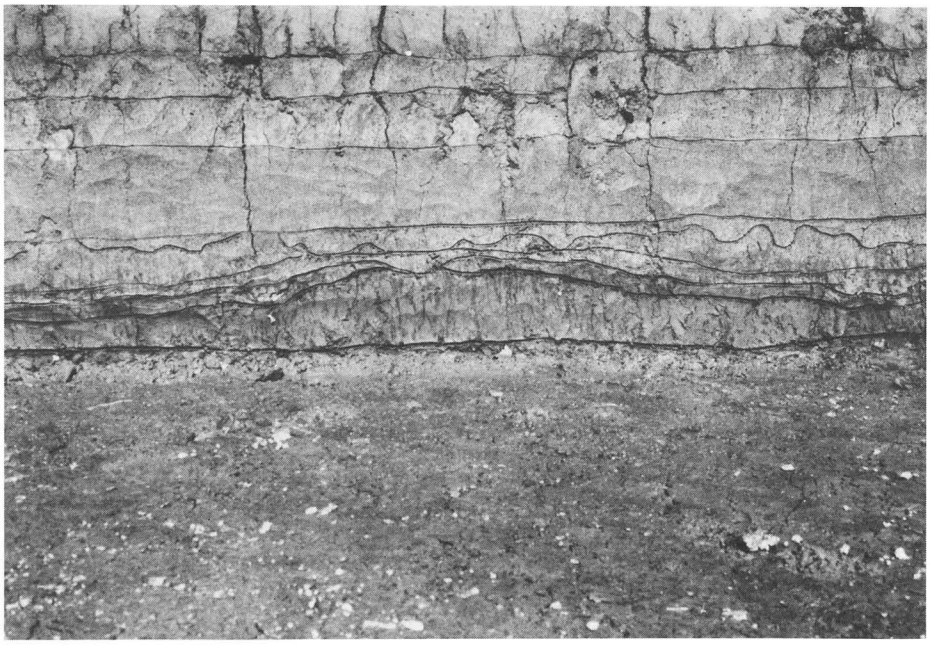
写真図版４

Ｊ―18グリッド検出遺構

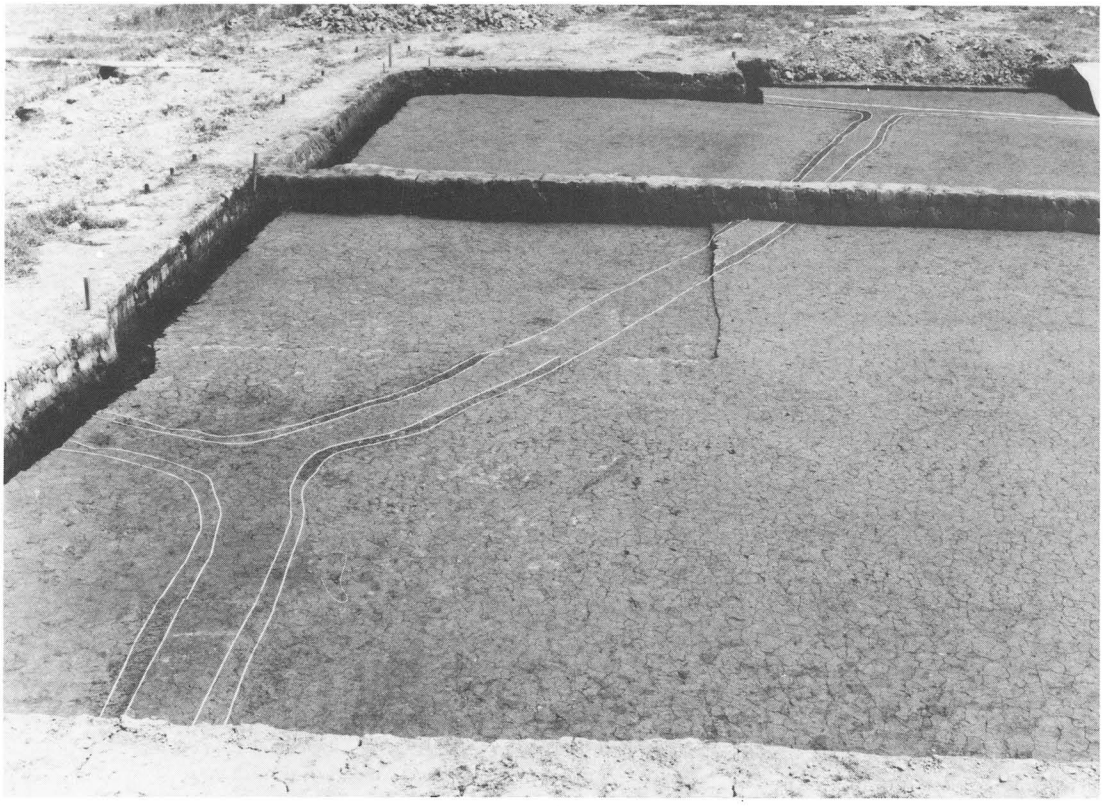


１．Ⅳａ層水田跡畦検出状況
（北西から）

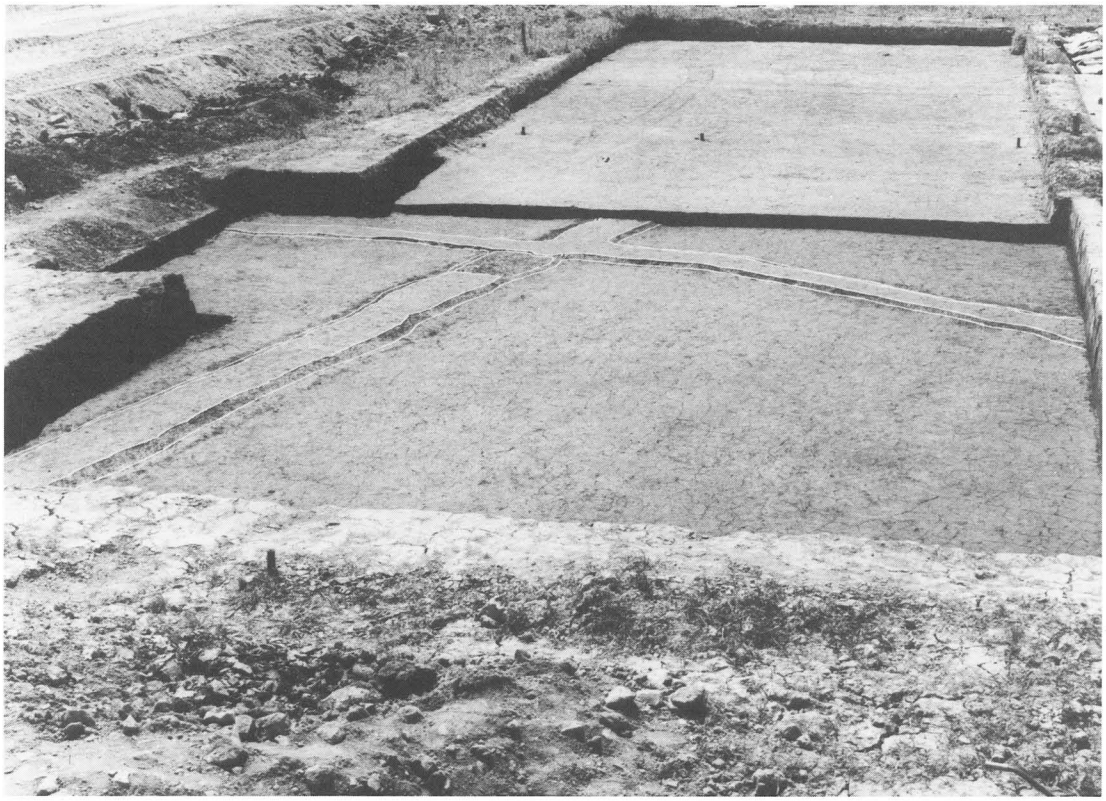
２．Ⅳａ層水田跡作土上面畦
（北西から）



３．Ⅳａ層水田跡畦断面
（東壁）



1．Ⅲｂ層水田跡作土上面(西から)

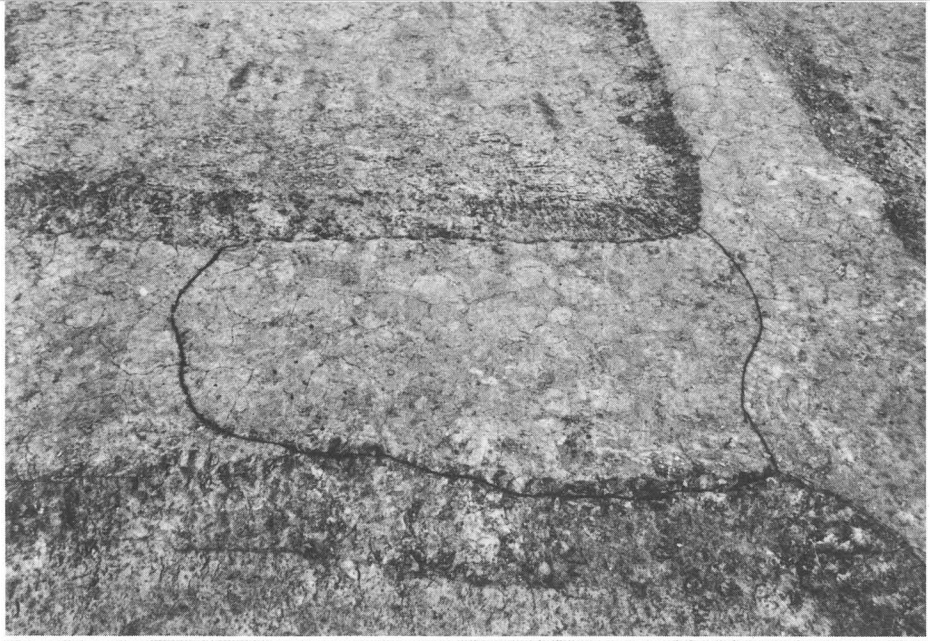


2．Ⅳａ層水田作土上面(北から北側はⅢｂ層水田跡検出状況)

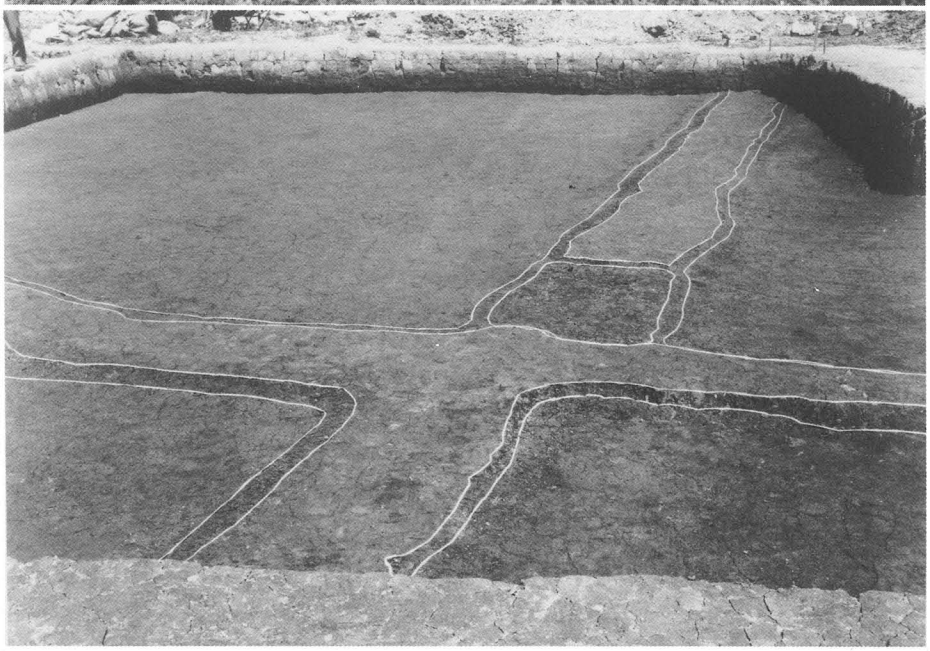
写真図版５　Ⅰ区検出遺構１

写真図版6

Ⅰ区検出遺構2



1．Ⅳａ層水田跡水口検出状況
（西から）



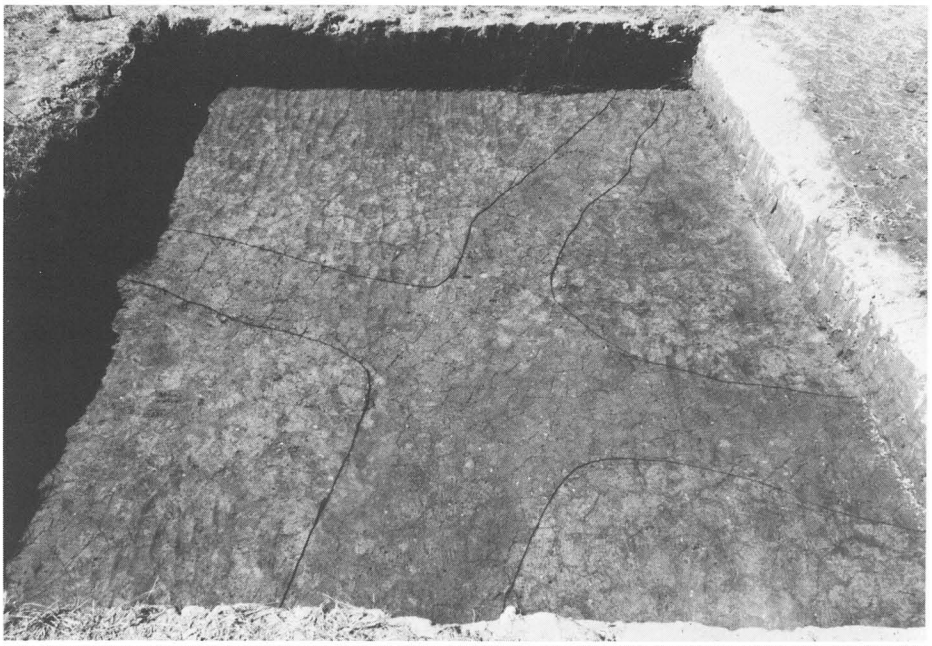
2．Ⅳａ層水田跡作土上面1
（南から）

3．Ⅳａ層水田跡作土上面2
（西から）

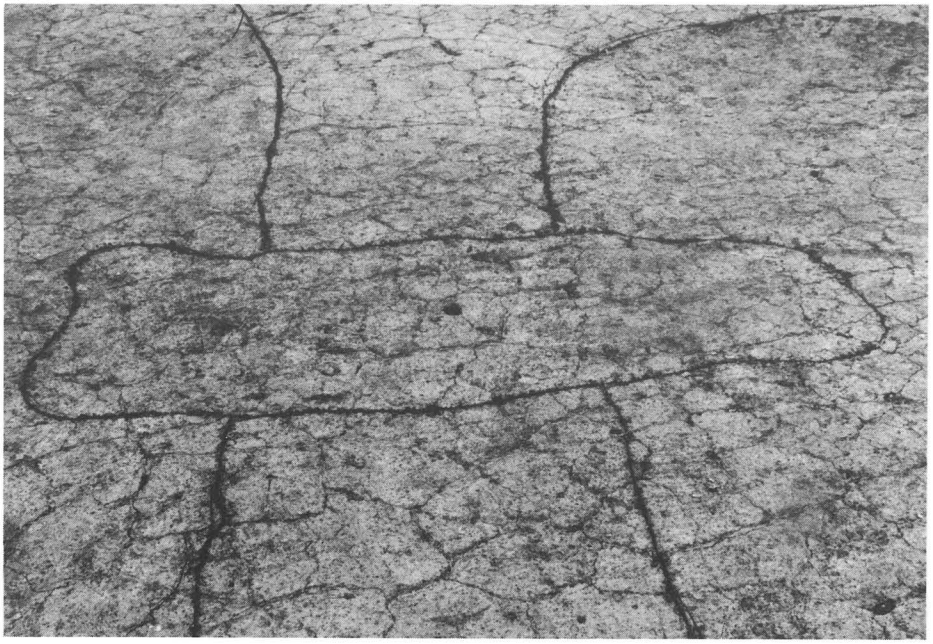
写真図版７

Ⅱ区検出遺構１

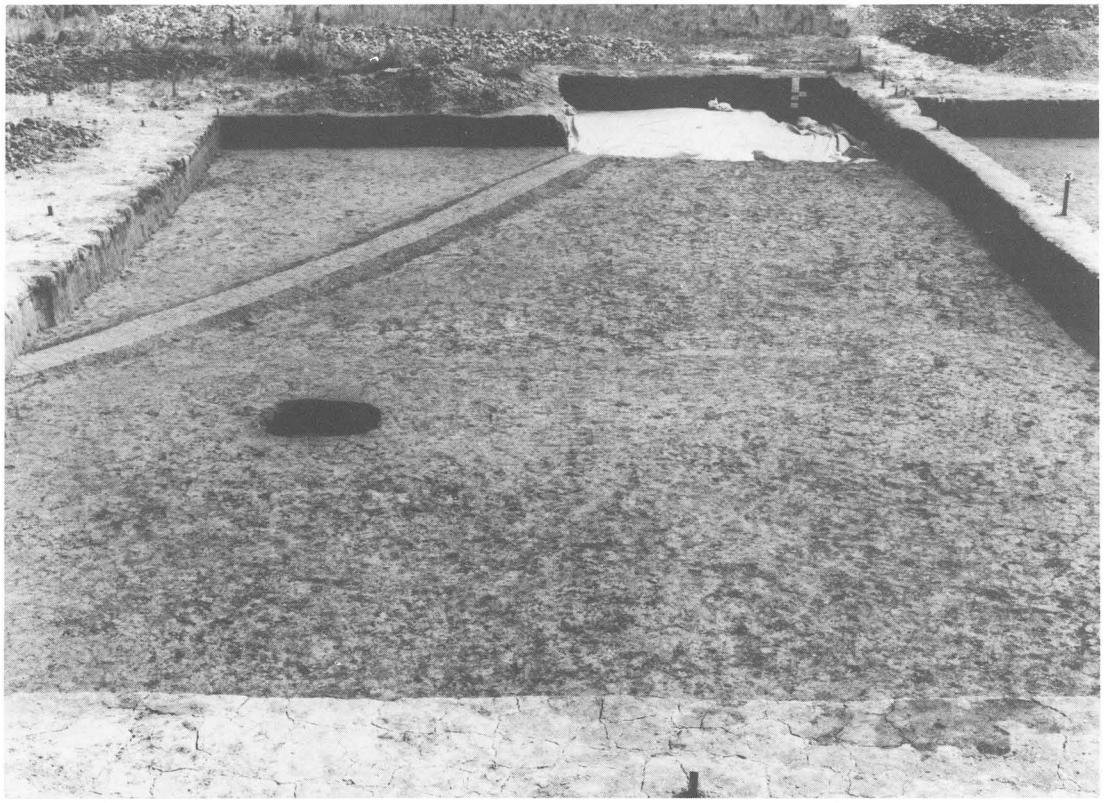
１．Ⅲｂ層水田跡畦検出状況
（Ｚ－18グリッド北から）



２．Ⅳａ層水田跡畦検出状況
（Ｚ－18グリッド北から）



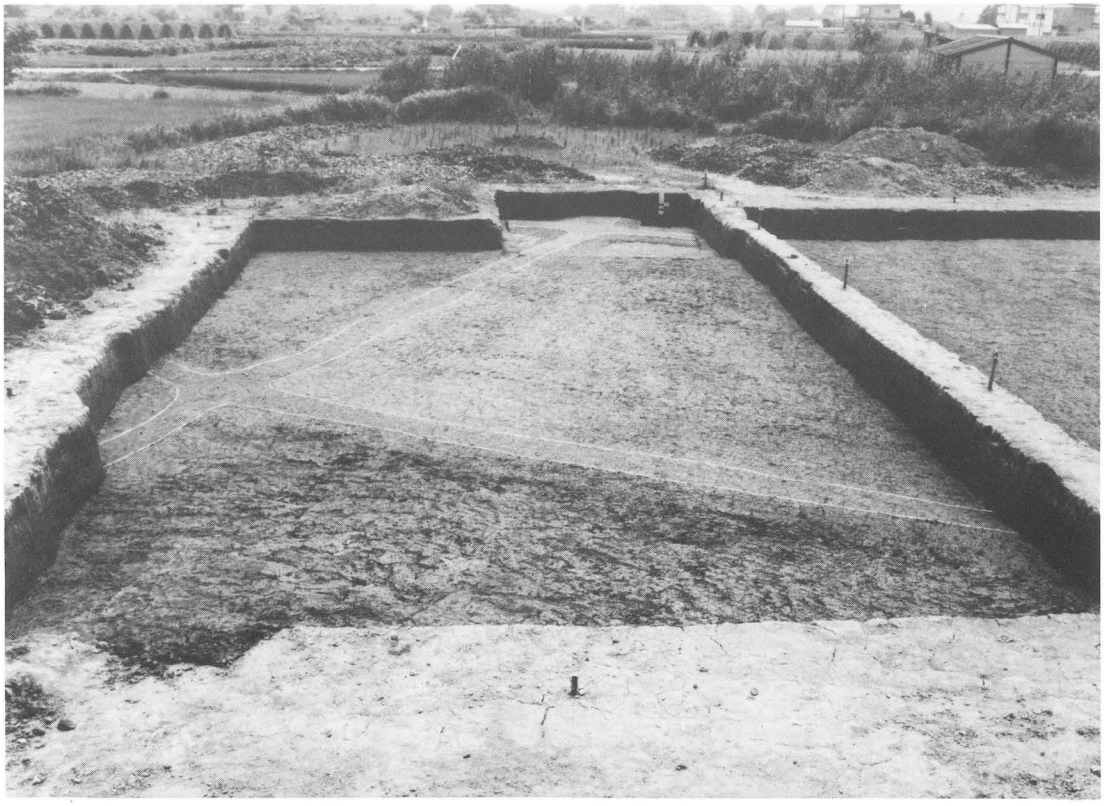
３．Ⅲｂ層水田跡水口検出状況
（南から）



1．Ⅲｂ層水田跡作土上面－東側－(北より)

2．Ⅲｂ層水田跡作土上面－西側－(北より)

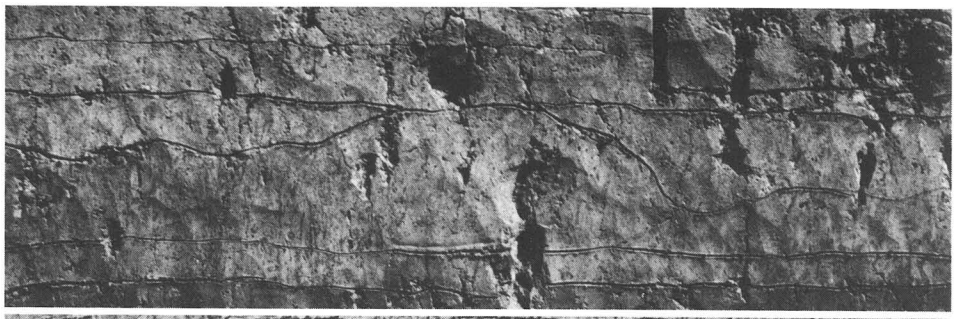
写真図版８　Ⅱ区検出遺構２



1．Ⅳａ層水田跡作土上面―東側―（北より）

2．Ⅳａ層水田跡作土上面―西側―（北より）

写真図版９　Ⅱ区検出遺構３



1．Ⅲｂ層水田跡畦と水口？断面
（Ｖ―16グリッド北壁）

2．Ⅲｂ層水田跡畦断面
（Ｖ―17グリッド北壁）

3．Ⅳａ層水田跡畦断面
（Ｗ―17グリッド東壁）

4．Ⅲｂ・Ⅳａ層水田跡畦断面
（Ｚ―17グリッド東壁）

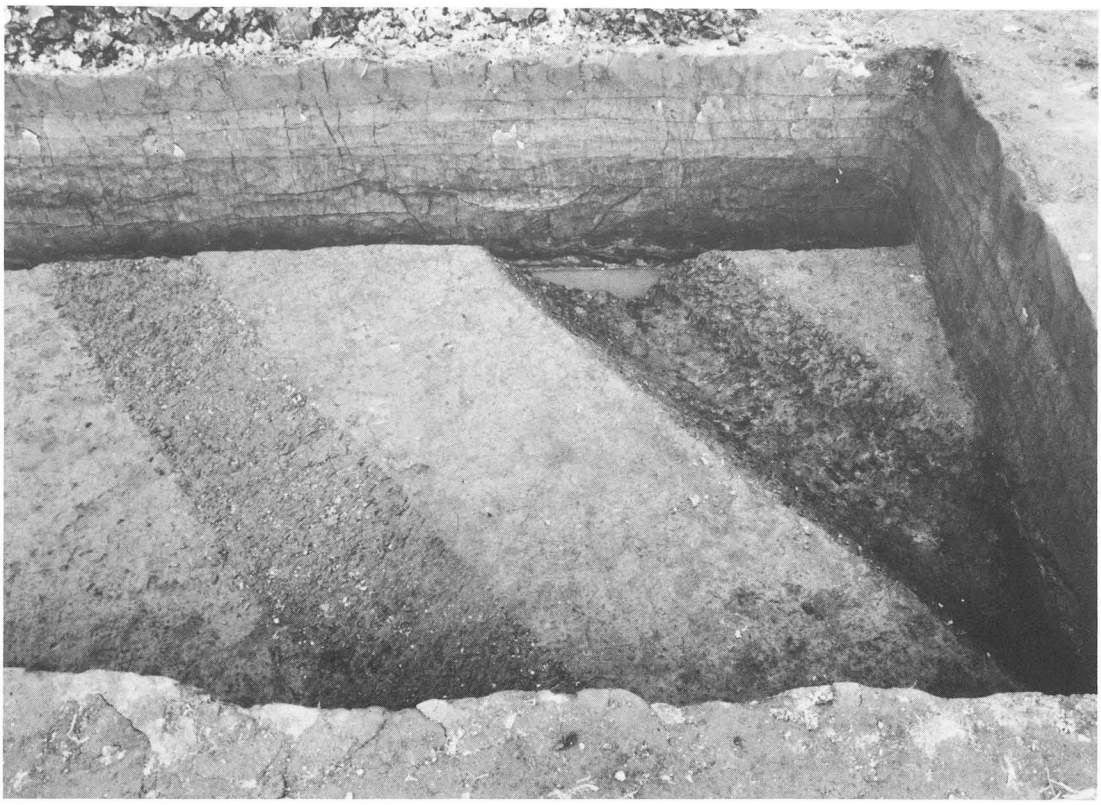
5．Ⅲｂ・Ⅳａ層水田跡畦断面
（Ｚ―15グリッド南壁）

6．Ⅲｂ・Ⅳａ層水田跡畦断面
（Ｖ―15グリッド西壁）

1．Ⅳａ層水田跡作土下面１（北から）

2．Ⅳａ層水田跡作土下面２（南から）

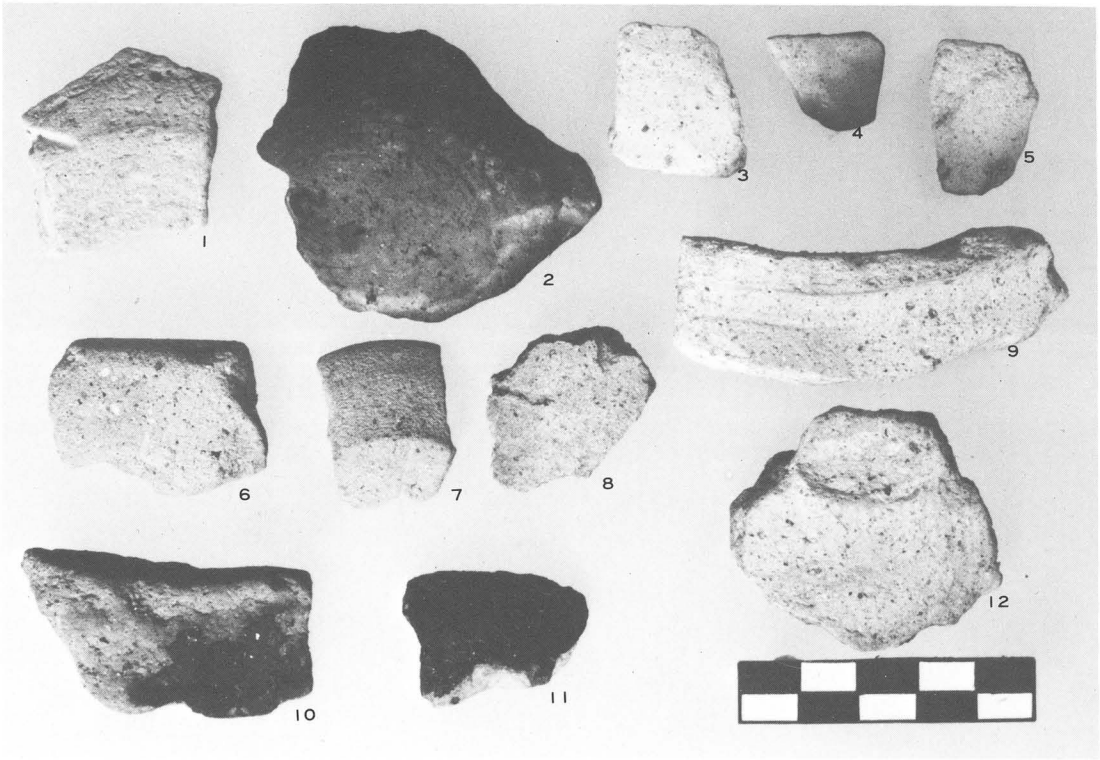
写真図版11　Ⅲ区検出遺構１

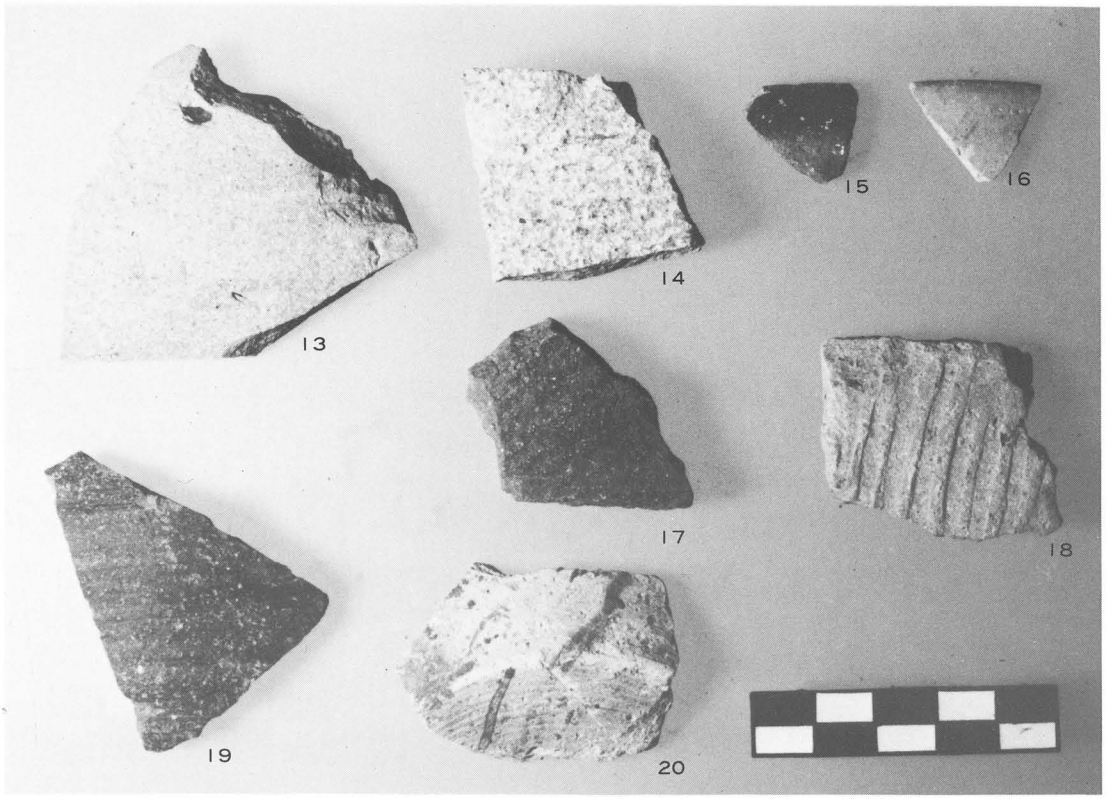


1．Ⅲ区Ⅳａ層水田跡水路

2．雨水管部分（Ｓ－18グリッド）Ⅲｂ層水田跡水路・畦断面（西壁）

写真図版12　Ⅲ区検出遺構２・雨水管検出遺構

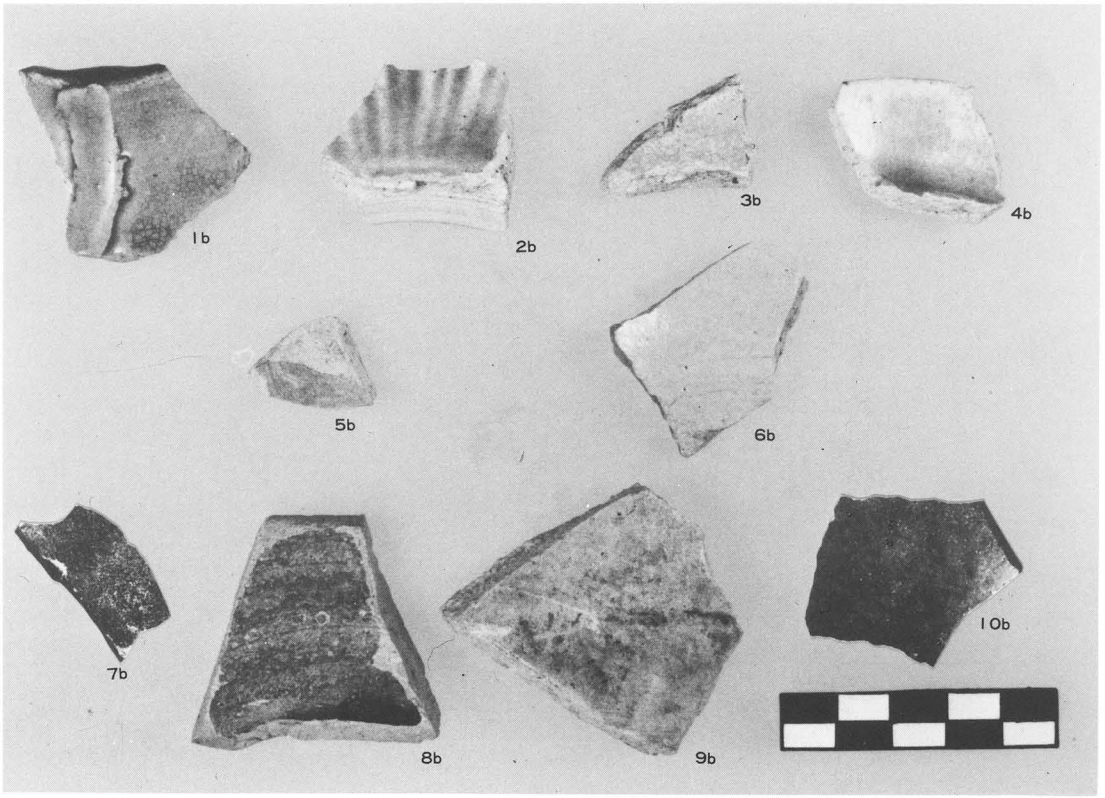




須　恵　器

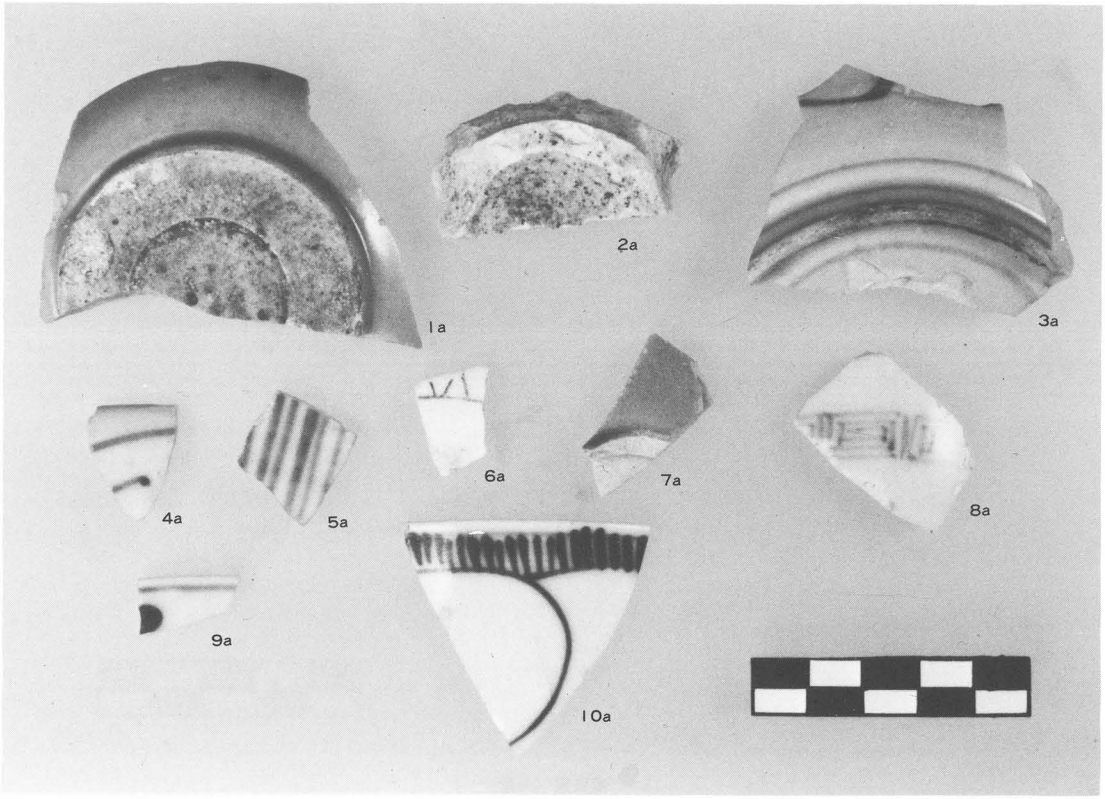
写真図版13　出土遺物1

瀬戸焼・美濃焼（外面）

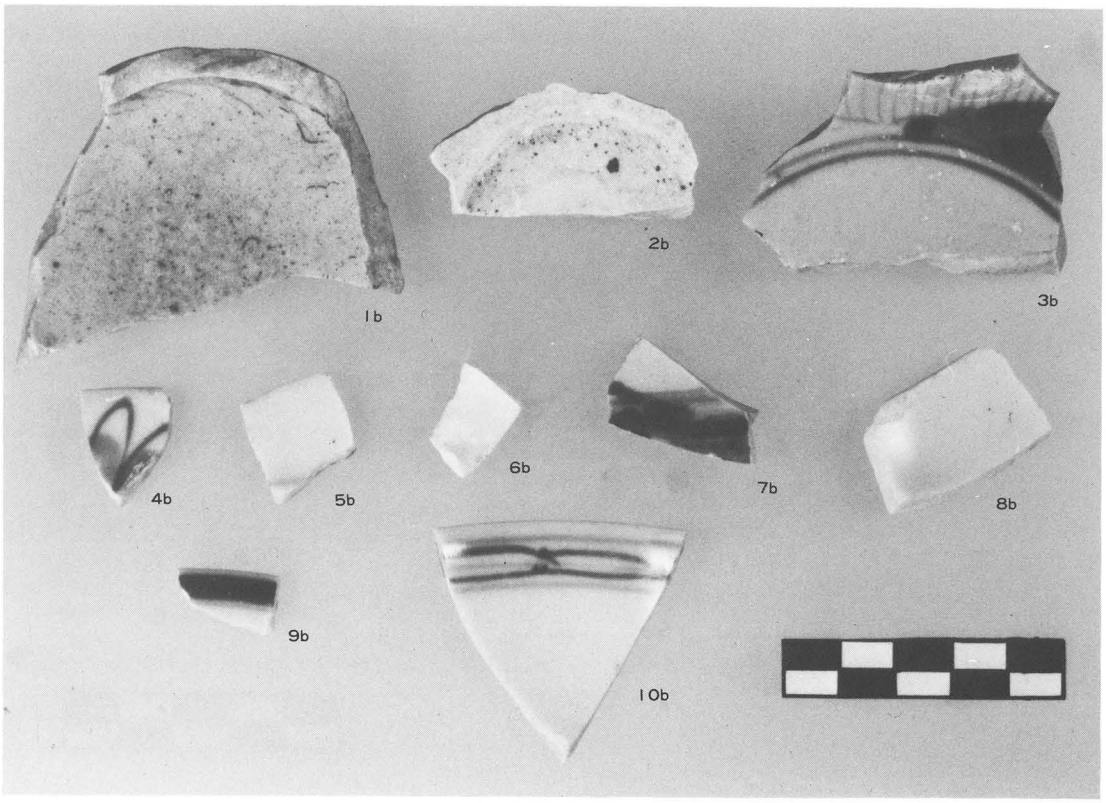


瀬戸焼・美濃焼（内面）

写真図版14　出土遺物2



肥前焼（外面）



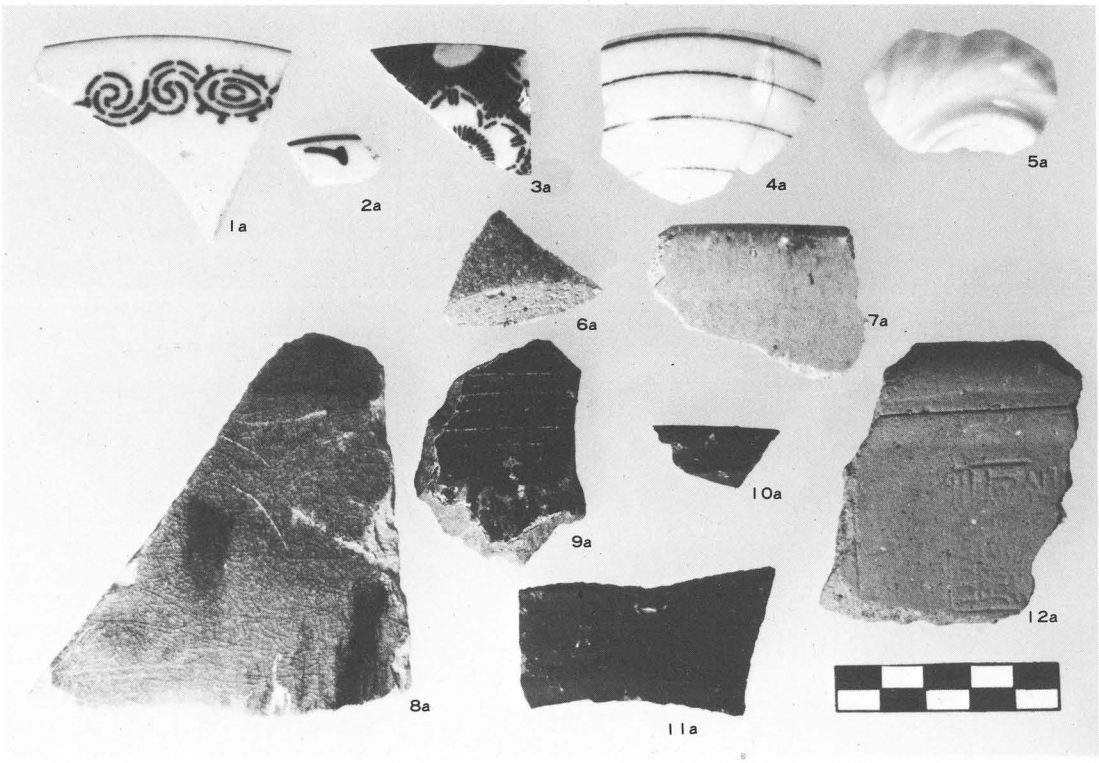
肥前焼（内面）

写真図版15　出土遺物 3

相馬焼（外面）

相馬焼（内面）

写真図版16　出土遺物 4



提焼等（外面）

提焼等（内面）

写真図版17　出土遺物５

提　　焼

提　人　形

写真図版18　出土遺物6

瓦・硯

古銭・煙管・刀子等

写真図版19　出土遺物7

第5表　巻頭カラー図版・写真図版遺物観察表

巻頭カラー図版

巻頭写真	グリッド	層位	種類	器種	部位	産地	年代	外面 施釉	外面 特徴	内面 施釉	内面 特徴	備考
4－1	V－17	Ⅲc_1	磁器	碗	体	中国	鎌倉後半～南北朝		蓮弁文		—	青磁　竜泉窯系
4－2	Y－17	Ⅲb	陶器	甕	体	常滑	鎌倉後半～南北朝	無	自然釉？	無	—	—
4－3	J－5	Ⅱb	陶器	甕	体上半	常滑	鎌倉後半～南北朝	無	灰被り	無	—	—
4－4	E－24	Ⅱb	陶器	擂鉢	体	唐津	16C末～17C初	鉄釉	下半露体	鉄釉	櫛目	—
4－5	F－4	Ⅱa	陶器	皿	体～底	志野	江戸初頭	長石釉	—	長石釉	—	鼠志野

写真図版

土師器・須恵器・土師質土器

写真図版	グリッド	層位	種類	器種	部位	外面調整	内面調整	備考
1	O－18	Ⅶ	土師器	坏	体下端～底	体：ロクロ　底：不明	ミガキ→黒色処理	外面磨滅
3	G－4	Ⅳa′	土師器	坏	体	ロクロ	黒色処理	内面磨滅
4	F－4	Ⅳa′	土師器	坏？	体？	ロクロ？	黒色処理	内外面磨滅
5	G－4	Ⅳa′	土師器	坏	体	ロクロ？	ミガキ→黒色処理	外面磨滅
6	F－4	Ⅳa′	土師質土器	不明	口縁	ロクロ	ロクロ	—
7	F－4	Ⅳa′	土師質土器	皿	口～底	体：ロクロ　底：不明	ロクロ	内外面磨滅
8	G－4	Ⅳa′	土師質土器	甕？	体	ロクロ	ロクロ	—
9	F－4	Ⅳa′	土師質土器	甕？	体上半	不明	不明	内外面磨滅
10	F－4	Ⅳa′	土師質土器	羽釜	鍔	不明	不明	内外面炭化物付着
11	G－4	Ⅳa′	土師質土器	燈明皿	口縁	ロクロ	ロクロ	内外面炭化物付着
12	G－4	Ⅳa′	土師質土器	甕	体	不明	不明	内外面磨滅
13	I－25	Ⅳa	須恵器	壺	体	ロクロ	ロクロ	—
14	F－4	Ⅳa′	須恵器	甕	体	平行叩き目	—	—
15	W－18	Ⅲa	須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	—
16	F－4	Ⅱa_2	須恵器	坏	口縁	ロクロ	ロクロ	—
17	Z－18	Ⅱb	須恵器	甕	体	平行叩き目	—	—
18	F－4	Ⅲb′	須恵器	甕	体	平行叩き目	ロクロ	—
19	I－4	Ⅱb	須恵器	壺	体	ロクロ	ロクロ	—
20	F－4	Ⅲb′	須恵器	坏	体下半～底	体：ロクロ　底：回転糸切り	ロクロ	—

陶磁器

写真図版	地区	層位	種類	器種	部位	産地	年代	外面 施釉	外面 特徴	内面 施釉	内面 特徴	備考	巻頭写真
14－1	O－18	Ⅱa	陶器	不明	口縁～体	美濃	中世(室町？)	灰釉	貫入	灰釉	貫入	—	5－1
14－2	O－23	Ⅱa	陶器	菊皿	体下半～高台	美濃	江戸(17C)	黄瀬戸釉	貫入　体下端～高台露体	黄瀬戸釉	貫入	—	5－2
14－3	O－23	Ⅱb	陶器	皿	体下半～底	美濃	江戸初頭	灰釉	体下端～底部露体	灰釉	—	底：回転糸切り	—
14－4	J－5	Ⅱb	陶器	小皿	口縁～体	美濃	中世(室町)	灰釉	貫入　体下半露体	灰釉	貫入	—	—
14－5	P－28	Ⅱa	陶器	壺類	頸？	美濃	中世？	灰釉	—	灰釉	—	—	—
14－6	J－5	Ⅰ	陶器	瓶類	頸？	美濃	江戸(17C)	御深井釉	貫入	御深井釉	—	—	—
14－7	Z－18	Ⅱb	陶器	碗	体下半	美濃	中世(室町？)	鉄釉	体下端露体	鉄釉	—	天目茶碗	5－10
14－8	E－24	Ⅱa	陶器	甕 or 小壺	体下半～底	瀬戸	中世？	鉄釉	体下端露体	鉄釉	—	底：回転糸切り	5－5
14－9	E－24	Ⅱa	陶器	梅瓶or瓶子	体	瀬戸or美濃	鎌倉後半～南北朝	灰釉	貫入	無	—	—	5－6
14－10	O－18	Ⅱa	陶器	碗	体	瀬戸or美濃	中世？	鉄釉	—	鉄釉	—	—	5－9
15－1	E－29	Ⅱa	磁器	香炉 or 鉢	体下半～高台	肥前	江戸(17C)		—		—	青磁　蛇ノ台高台	5－11
15－2	O－13	Ⅱb	磁器	皿	高台	肥前	江戸(18C後半)	無	—		—	輪ハゲ皿	5－3
15－3	O－13	Ⅱa	磁器	皿	体～高台	肥前	江戸(18C)		染付(界線等)		染付(草花文・界線)	—	5－7
15－4	O－18	Ⅱa_2	磁器	不明	口縁～体	肥前	江戸中期		染付		染付(草花文)	—	—
15－5	J－5	Ⅱa	磁器	不明	体	肥前	江戸？		染付		染付(界線？)	—	—
15－6	O－23	Ⅱa	磁器	不明	体下半	肥前	不明		赤絵		一部剝離	—	—
15－7	P－28	Ⅱa	磁器	皿	体下半～高台	肥前	幕末	青磁釉	—		染付	青磁染付	—
15－8	P－28	Ⅱa	磁器	碗 or 鉢	体	肥前	幕末？		染付(雷文)		—	—	—
15－9	P－28	Ⅱa	磁器	不明	口縁	肥前	幕末～明治		染付(界線等)		染付(界線)	—	—
15－10	表採	—	磁器	碗	口縁～体	肥前	明治		染付		染付	—	—
16－1	O－23	Ⅱa	陶器	土瓶	注口	相馬	明治初期	青釉？	貫入	無	—	多孔式	—
16－3	J－5	Ⅱa	陶器	土瓶蓋	口縁～体	相馬	幕末～明治	灰釉	染付　釉切れ　貫入	無	—	—	5－4
16－4	I－4	Ⅱa_1	陶器	土瓶蓋	口縁	相馬	幕末～明治	白釉	貫入	無	—	施釉糠白釉？	—
16－5	P－28	Ⅱa	陶器	土瓶？	体下半	相馬	幕末～明治	灰釉	鉄絵　下端露体	灰釉	上半化粧土の刷目	施釉薄い灰釉？	—
16－6	P－28	Ⅱa	陶器	皿	口縁～体上半	相馬	幕末～明治	白釉	—	白釉	—	施釉藁灰釉？	—
16－7	O－23	Ⅱa	陶器	碗	口縁～体上半	相馬	幕末～明治	白釉	—	白釉	—	施釉藁灰釉？	—
16－8	E－24	Ⅱa	陶器	大皿	体下端～高台	相馬	江戸後期	灰釉	高台部露体　貫入	灰釉	貫入	—	—
16－9	O－18	Ⅱa	陶器	碗	体	相馬	江戸後期？	鉄釉・灰釉	施釉塗り分け	灰釉	貫入	—	—
16－10	J－5	Ⅱa	陶器	土瓶？	体	相馬	幕末～明治	灰釉	鉄絵	無	—	—	—
16－11	P－28	Ⅱa	陶器	瓶類	口縁～頸	相馬	幕末～明治	白釉	—	白釉	—	施釉藁灰釉？	—
16－12	P－28	Ⅱa	陶器	小碗	体下半～底	相馬	幕末～明治	白釉	下端・底部露体	白釉	—	施釉藁灰釉？	—
17－1	E－24	Ⅰ	磁器	皿	口縁～体	不明	明治		染付		摺絵	産地東北地方か	—
17－2	表採	—	磁器	碗	体	不明	明治		染付		摺絵	産地東北地方か	—
17－3	G－4	Ⅱa_2	磁器	碗	口縁～体上半	不明	明治		摺絵(花文)		摺絵	—	—
17－4	I－24	Ⅰ	磁器	碗	口縁～体	不明	幕末～明治		染付(界線)		染付(界線)	—	—
17－5	I－24	Ⅰ	磁器	碗	体下半～高台	不明	明治	青磁釉	—		染付(龍文？、界線)	青磁染付	—
17－6	I－24	Ⅱa	陶器	碗	体下半	不明	江戸？	灰釉	貫入　下端露体	灰釉	貫入	産地東北地方か	—
17－7	O－23	Ⅱa	陶器	片口鉢	口縁～体上半	不明	幕末～明治？	青釉	貫入	青釉	貫入	産地東北地方か	—
17－8	I－23	Ⅰ	陶器	甕	体	不明	幕末～明治？	灰釉	一部青釉・鉄釉	鉄釉	—	産地東北地方か	—
17－9	F－4	Ⅰ	陶器	甕	体	堤	幕末～明治	海鼠釉	—	灰釉？	—	—	—
17－10	O－23	Ⅱa	陶器	鍋 or 鉢	口縁	堤	幕末～明治	鉄釉	—	鉄釉	—	—	—
17－11	O－18	Ⅱa	陶器	擂鉢	体	堤	明治以後	鉄釉	—	鉄釉	櫛目	—	—

職　員　録

社会教育課

課　長	阿部　達
主　幹	早坂春一

文化財管理係

係　長	佐藤政美
主　事	岩沢克輔
〃	山口　宏

文化財調査係

係　長	佐藤　隆	主　事	吉岡恭平
主　事	田中　則和	〃	工藤哲司
〃	結城　慎一	〃	渡部弘美
教　諭	菅原　和夫	教　諭	渡辺　誠
主　事	木村　浩二	主　事	主浜光朗
〃	篠原　信彦	〃	斎野裕彦
教　諭	小野寺和幸	〃	長島榮一
〃	佐藤美智雄	〃	及川　格
主　事	佐藤　洋	教　諭	千葉　仁
〃	金森　安孝	〃	松本清一
〃	佐藤　甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和55年３月）
第22集　経ケ峯（昭和55年３月）
第23集　年報Ⅰ（昭和55年３月）
第24集　今泉城発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）

第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概報―（昭和58年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡（昭和58年３月）
第59集　下ノ内浦遺跡（昭和58年３月）
第60集　南小泉遺跡―倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第61集　山口遺跡Ⅱ―仙台市体育館建設予定地―（昭和59年２月）
第62集　燕沢遺跡（昭和59年３月）
第63集　史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年３月）
第64集　郡山遺跡Ⅳ―昭和58年度発掘調査概報―（昭和59年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ―昭和58年度発掘調査報告書―（昭和59年３月）
第66集　年報５（昭和59年３月）
第67集　富沢水田遺跡―第１冊―泉崎前地区（昭和59年３月）
第68集　南小泉遺跡―都市計画街路建設工事関係第３次調査報告（昭和59年３月）
第69集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年３月）
第70集　戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年３月）
第71集　後河原遺跡（昭和59年３月）
第72集　六反田遺跡Ⅱ（昭和59年３月）
第73集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅱ（昭和59年３月）
第74集　郡山遺跡Ⅴ―昭和59年度発掘調査概報―（昭和60年３月）
第75集　仙台平野の遺跡群Ⅳ（昭和60年３月）
第76集　仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年３月）
第77集　山田上ノ台遺跡―昭和59年度発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第78集　中田畑中遺跡―第２次発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第79集　欠ノ上Ⅰ遺跡発掘調査報告書（昭和60年３月）
第80集　南小泉遺跡―第12次発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第81集　南小泉遺跡―第13次発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第82集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅳ（昭和60年３月）
第83集　年報６（昭和60年３月）
第84集　仙台市文化財分布調査報告書Ⅲ（昭和60年３月）

仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上Ⅰ遺跡

— 平安時代末〜中世の水田跡 —

昭和60年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　共新精版印刷

仙台市日の出町2－4－2
TEL 36－7181